
D e l i v e r y c h i l d r e n .

詩音

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

Delivery children .

【Nコード】

N3257B

【作者名】

詩音

【あらすじ】

世界は壊れつつある。そんな時代に、記憶喪失の『僕』を拾ってくれたのは、同じ年くらいの運び屋だった。「生きるために、貴方は何をしますか……?」

Delivery children .

Delivery children.

プロローグ（前書き）

ありきたりな話かもしれませんが読んでみてください。

*前と少し文章を変えました。勝手なことをして申し訳ありません。

プロローグ

「…。」
「ここはどこなんだろう。僕は何してるのかな…？
空を見上げれば灰色に曇っていた。」

「お前何してんだ？」
僕が後ろを見るとそこには男の子が一人いた。
同じ年くらいで背格好も僕と似てる。髪の色は綺麗な銀色で服は
全身真っ黒。でもそれより気になったことは、雨が降ってないのに
も関わらず傘をさしていたことだった。

「どうして…傘をさしてるの？」
「…は？」
その子は目を丸くしていた。
そんなに驚くことかな…。

「お前、傘持つてないの？」
僕は自分の身の回りを見たけど、特に何も見当たらなかった。
「早く入れ！！もうすぐ雨だぞ！！」
腕を無理矢理引かれて僕はその子の傘の中にいた。
「雨がダメなことなの？」
「…お前何者？この国の状況知らないなんておかしいぜ？」
何者？って…あれ？
「僕って誰…？」
「は…？」
「わかんない…何も思い出せないよ…。」
必死に頭の中に呼び掛けるけどまったく答えてくれない。

「記憶喪失ってやつか？」

猫に似たその子の目は僕を定める。

「わかんない…。」

僕にはそれしか言えなかった。

「…面倒なもんに関わったなあ。」

しばらくして横から大きなため息が聞こえた。僕はうつ向きとしかできない。

「この近くにさ、俺の家があるんだよね。」

「？」

「俺の同居人結構物知りだから、お前の役に立つかもよ？」

自分をアオと名乗ったその子は僕にニツと笑いかけた。

それがそのとき僕が覚えてた最後の景色だったと思う。

第1話

真っ暗な闇の中。

僕はただ歩いている。

「ユウ…シユウ!!」

「お前だけでも逃げる。良いな？」

どこからか声が聞こえた。それは何だか懐かしくて闇の中で僕は泣いていた。

「あ…」

僕は目を覚ました。今は夢だったようだ。

起きた場所は闇の中でも街の中でもない。室内だった。体に当たる感触でソファに横になっているのがわかる。

窓に雨が当たる音が自然と僕の耳に入ってきた。

「やっと起きたか。」

僕の目の前に現れた少年、アオはじつと僕を見つめる。

「お前倒れたんだぜ？覚えてるか？」

記憶喪失だからすぐに忘れられると思っているのだろうか。

「うん。。。」

「そっか。」

少し安心したようだ。

Delivery children.

アオは僕に湯気の出ているカップを差し出す。

「？」

「飲めば？ココアだけど…って記憶喪失はココアわかるのか？」

…勝手に僕は記憶喪失という名前にされたらしい。

ふと夢で聞こえた名前が口から溢れる。

「…シユウ…。」

「シユウ？」

「夢でそう呼ばれたんだ。誰がかはわからないけど…。」

「ふーん…じゃあこれからお前はシユウな？」

俺はアオで良いから、そう言つてアオは片方の口端をつり上げて笑った。

「ねえ、アオ。僕を運んでくれたの？」

体に乗せられた毛布をどかしながら聞いた。

「ああ。」

「…一人で？」

「当たり前だろ。」

正直僕は驚いた。体格だつてそんなに変わらないのだから運ぶのは簡単なことではないだろうから。

「お前自分が重いか心配してんの？」

「…。」

何とも言えずに黙る僕。

「軽かったよ、それに俺結構鍛えてるし。…お前本当に記憶喪失なの？」

「え？」

「だって普通に話せるから。」

「あの…」

アオの頭にある記憶喪失のイメージを変えようと口を開いたそのとき

「アオ、まさか記憶喪失は何もわからないとでも思ってるの？」
突然降ってきた声に僕は心臓が飛び上がりそうになった。

「アリア。シユウが驚いてんじゃねえか。」

「悪かったわね、あんたの勘違いを直すのが先だと思ったのよ。」
そう答えたのは茶色で肩より長い髪の少女だった。肌は陶器のよ
うに白く、漆黒の瞳で胡散臭そうに僕を見ていた。

僕にはその子がとても可愛らしく映った。

「俺のどこが勘違いしてるっていうんだよ。」

「…記憶喪失にはね、いろんな症状があるの。言葉も覚えてないか
ら何もできない場合もあるし、その子みたいに普通の生活が出来て
も自分のことは一切わからない場合もあるの。」

「へえー。」

…僕にはアオが適当に答えているようにしか見えなかった。

「あの…アオの友達？」

僕は少女に尋ねる。大きくて丸っこい瞳に僕が見えた。

「ただの仕事仲間よ。アオ、この子どうする気？」

「んー此所に住ませれば？」

「…はあ？」

明らかに不機嫌そうなアリアと呼ばれた少女。

「あ…の、僕もう大丈夫だから、お世話になりました。」

助けてもらった相手に迷惑をかけるわけにはいかないと思った。

僕は頭を下げてから立ち上がって外への扉に向かう。

「馬鹿か！！雨降ってんだって言ってんだろ！！？」

アオの手が僕の腕をつかんだ。

真っ赤な手の痕がつくくらいに。

「アリア！！お前も酷すぎだろ！！！」

「あんたが甘い。この国ではそう簡単に人を信用しちゃ駄目なの、

わかってるでしょ？」

冷たく言い放つアリア。

同じ年くらいなのに僕よりも大人に見える。…よく見ればアオもそうだ。たまにだが大人びた目をしている。

「シユウは記憶喪失だぞ？」

「嘘かもしれないじゃない。」

「それなら雨のことを知らないはずがねえだろ！！」

僕を置いて二人の口喧嘩は激しさを増す。

そのとき

「はい、ストップ。」

僕達の後ろには右目に眼帯をした白髪頭の男がいた。年は二十歳前後くらいでなかなか端正な顔立ちをしている。

「カイ…いつも良いところで邪魔してくれんじゃん。」

怒りを見せつつ笑っているアオの表情は…かなり恐かった。

「相変わらず気配消すの上手いわね。」

アリアは喧嘩する気をなくしたようだ。

「あの…？」

僕は恐々カイという男に話しかける。

「あー、ごめんね？こんな喧嘩見せちゃって。俺はカイ。わかりやすく説明すると…この二人の保護者かな。」

優しそくに微笑むカイさんを見て僕は少しだけ安心した。

「僕は…シユウだと思います。」

はつきりとした自信がなかったたので、そう言うことにした。

「うん、君は今日からシユウだ。だから自信持ってシユウって名乗りな？」

「はいっ。」

カイさんの言葉が嬉しくて僕は大きく首を縦に振った。

「うん、素直でよろしい。」

そう言っただけでカイスさんはフツと笑みを見せた。

「アリアー、シユウはこれから俺達の仲間ね。」

「カイまで…本気？」

「うん。今決めた。」

「勝手にしてよ。」

アリアは盛大なため息を吐いて階段を昇って行ってしまった。
僕がそれをじっと見ていると

「気にすんなよ。アリアはいつもあんなかんじだから。」

「…うん。」

そう言われてもやはり好かれてない人間と一緒に住むのは抵抗がある。

「シユウ、今からこの国のことを話すから、ちゃんと覚えてね？」

カイスさんの言葉に僕の中で緊張が走る。

「俺上にいるわ。」

「アオ、悪いけどお前のレインコート貸してくれない？」

「…取ってくる。」

アオは階段を駆け上がった。展開についていけずに僕がカイスさんを見上げていると

「百聞は一見にしかず、ってね。」

そう言っただけでカイスさんは僕に微笑んだ。

第1話（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

更新は遅いですが、週一ペースで頑張ろうと思います。よろしくお願ひいたします。

なお、プロローグと第1話の内容を少し変えました。勝手なことをして申し訳ありません。

Delivery children.

第2話

「これ着て？ボタンもしっかりとめてね。」

アオから借りたレインコートはいたって普通の透明なコートだった。

「フードもかぶった方が良い。」

言われるままに僕は後ろについているフードを頭にかぶせた。

そんなに嚴重にする必要はあるのかなあ、と思っていると

「行こうか。」

そう言ってカイさんは大きな黒い傘をさした。白髪によく映えている。

「本当はあんまり見せたくないんだけど…」

複雑そうに微笑むカイさんがネズミを手を持っていた。それはジタバタとカイさんの手から逃げようとしている。

僕が見たところ普通のどこにでもいるネズミだ。

「見ててね。」

そつとネズミを逃がしてやる。

最初の数歩は勢いよく飛び出したネズミだが、突然ピタリと足が止まった。

「…？」

僕が不思議がっているのもつかの間に、ネズミはかん高い声で鳴き出した。

そして、僕の目の前で信じられない光景が起こったのだ。

「見たね？」

「…今のつて…」

カイさんはネズミをハンカチを使って拾いあげる。否、先ほどまでネズミだったモノを。それは皮膚も肉も溶け、骨だけの姿に成れ果てていた。

「これがこの雨の力なんだ。」

「…っ。」

僕は目の前にさらけ出されたネズミの死骸を見て胃の中のものが逆流しそうになった。

しかし胃にあるのはココアだけだったので何も出てくることはない。

「悪かったね、酷いものを見せた。」

ハンカチを折り畳んで骨を隠し、僕の頭をくしゃ…と撫でるカイさん。その表情は僕の目に悲しそうに映った。

「…この雨は生物の細胞を壊すんだ。だから植物は室内に飾られ、動物は室内で飼われる存在。俺達人間も雨に濡れないように毎日細心の注意を払ってる。それだけは忘れちゃ駄目だから。」

僕は何度も頷く。

「そろそろ中に入ろう。まだシユウは病み上がりだからね。」

カイさんの家に入るとき、扉の横にある看板が僕の目に入った。

「「骨董屋」…？」

「俺の店。シユウが寝てたソファの周りにも品物があつたらう？」
思い返せば古時計や壺などが並んでいた気がする。

それと同時に一つの不安がよぎった。

「…カイさん、僕お金とか持ってないんだ。だから…」

「シユウはアオより頭の回転が早いみたいだね。」

フツと笑みを溢しカイさんは屈んで僕の目線にあわせた。

「じゃあシユウには此処の店番してもらおうかな。」

僕は頷く。住ませてもらうのに何もしないのは絶対に嫌だった。

二人で中に入るとアオがソファに座っていた。

「おかえり。」

「ただいま。」

「カイも悪趣味だよな、子供にあんなもん見せるなんて。」

「子供」という単語で僕はあることに気づいた。

「アオは何歳なの？」

自分の年を知らないのだ。

「俺？…さあ？」

アオはどうでもよさそうに答える。

「体格から見たら12歳くらいかな。」

カイさんは僕とアオを眺めて呟いた。

「アリアも同じくらいだと思っよ。で…アリアは？」

「部屋に籠ってる。」

眉間にシワを寄せてアオは言った。

「呼んでくる。仕事があるから。」

カイさんはアリアの部屋に行ってしまった。

「久々の仕事かぁー。」

「…アオの仕事って何？」

グツと伸びをするアオの背中に僕は尋ねた。

「運び屋かな。」

「運び屋？」

「いろんなモノを指定された場所に運ぶんだよ。」

アオはポケットから棒付きの飴を取りだして口に運ぶ。

「食っ？」

もう一つ飴を出して僕の前にかざした。

「…ありがと。その仕事って大変なの？」

「んー…まあモノによってかな。このご時世じゃろくなもんはない

けど。」
「ふーん…。」

「おしゃべり。」
僕が飴を口に入れた丁度そのとき、アリアとカイさんが下に降りてきた。

アオとアリアは睨みあっている。

「こら、喧嘩しちゃ駄目。今回の仕事は早めに済ませればその分報酬が高いんだから。」

「マジ！？そんじゃあ早く行こうぜ！！」

報酬：お金に関する単語にアオは目をキラキラと輝かせていた。

理由は子供っぽくないけど年相応に見えるなあ、なんて思っていたらふと痛い視線を感じた。

「…。」
アリアだ。やはりまだ僕は彼女に認めてもらえないらしい。

「シユウは此処の店番を頼むよ。…まあそんなに人気があるわけじゃないからのんびり店を散策してみて。」

「一日に一人来れば良い方だもんな。」

…だいぶ暇がありそうだ。

「それに常連なら事前に連絡が入るんだ。今日は何も来てないから。」
行つてきます、そう言つて三人は仕事に向かつていった。

カチコチと古時計の針が時間を刻む音が聞こえてくる。
外を見ればすでに雨は止んでいた。

僕はソファの隅に腰掛けて辺りを見渡す。

よく考えれば、記憶喪失になってから一人で過ごすのは初めてのことだった。

「…何かしなきゃ。」

ボーツとしてるより少しは動くべきだと思い、何をすべきか考えて下を見た。

「うわ…。」

フローリングの床が埃を被って白くなっている。

そういえば僕もアオ達も土足で此処を出入りしていたっけ…。

「…掃除しよ。」

誰もいない部屋で呟く。物置らしき部屋から掃除用具を取り出して、モップで床を磨く。

「おや、新しいメンバーかな？」

掃除に集中していたのか僕は来訪者に気付かなかっただらしい。

来訪者は茶系のスーツに身を包み、丸い帽子を被った初老の男性だった。

「あ、い、いらっしやいませ…」

初めての客に僕の緊張は増す。

しかし当人は気にしてないようで暑そうに帽子を脱いでうちわ代わりに扇いでいる。

「君一人かい？カイや他の子は？」

「仕事に行きましたけど…。」

カイさん達の存在を知ってるなら常連なのかもしれない、僕はそう考えた。

「ああ、もうやってくれてるんだね。それじゃ、これをカイに渡し
てくれないかな？」

それは白い封筒だった。分厚い何かが入っている。

「これは…?」

「君は何もまだ教わってないんだね。仕事の報酬だよ。」
覗いて見るとお札が数十枚入っている。

いくらかはよくわからなかったけど、僕の目が点になるくらいの枚数だった。

「そろそろ失礼するよ。」

ゆっくりと椅子から腰を上げて老父は言った。

「そうそう、君の名前は?」

「…シユウです。」

「シユウ君か、良い名だ。また来るよ。」

柔らかな微笑みを残して老父は出ていった。

僕は札束入りの封筒を眺めて、老父の存在やアオ達の仕事かどんなものなのか、僕は気になって掃除の続きができなかった。

Delivery children.

第3話（前書き）

い。
今回はアオの視点で話が動いています。注意して読んでみてください。

第3話

「ねえ、あの子に店任せて平気なの？」

俺の横でアリアが言う。まだシュウが信用されてないことがわかって俺は少し不機嫌になった。

「俺はシュウを信じてるからね。」

カイはのんびりとした口調で言った。

さすが俺達の保護者。シュウのことよくわかってるじゃねえか、と俺はカイを見直した。

「おしゃべりは此処までにしよう。そろそろ目的地だ。」
来た

この瞬間から俺は感情を押し殺す。

勿論アリアとカイもだ。

目の前には雑居ビル。

此処に俺達の運ぶモノがあるわけだ。

「はあ…。」

「見苦しいわよ、いい加減慣れたら？」

盛大なため息にアリアの文句が出る。

「…こんな仕事に慣れたら人間じゃなくなる。」

俺の気持ちは店に置いてきたシュウに向いていた。
何も起きてないといいけど…。

「アオ、行くよ。」

「…了解。」

飴が入っていたのとは逆のポケットから鉄の塊を取り出す。

弾が入っているか確認をして、カイに合図を見せた。
「よし、Ready: go!!」

「…割りとおっけなかつたな。」

体中に鉄の錆びた臭いがつく。でも俺はそんなもんには慣れた。

「で？モノはどれ？」

返り血を持っていた布で拭うアリア。その顔は今十数人の人間を殺した奴の顔ではない。

「うーんと…ああ、そこに積み重なってる山の一番下の奴だ。」

「…アオ、やってよ。」

「はあ？何で俺が…」

積み上げたのは他でもないアリアなのに。

「女は体力が無いの。」

「…こういうときだけ性別を使うのは理不尽だと思う。」

「しょうがねえな…」

そこで言うことを聞く俺も俺だが。

「良いよ、首から上があれば良いから。後は俺がやる。二人はいつもの店に行ってから戻ってくれる？」

「わかった。」

俺とアリアはカイの言うことに従い、ビルから離れた。

この仕事は運び屋。

そうシユウには教えたけど、そんな楽なものじゃない。依頼人から要求されたモノを必ず運ばなければいけない。…勿論それが人間の死体でも。

運び屋の仲間になってから、俺は黒い服しか着なくなった。

返り血をわからなくするためだ。乾いた血液は黒くなる。

「こんにちは。」

「…まあ、あなた達かい。今日も血の臭いさせて…」

俺達が来たのは古ぼけた銭湯。その番台に座っているのはミサバあちゃん。

年寄りのくせに鼻は良いみたいで、仕事終わりの俺達を見ると必ず顔をしかめる。

「仕事終わりなんだよ。」

「…人殺しが仕事とは悲しいこつたね。」

ミサバあちゃんの言葉に何も返せず、俺とアリアはそれぞれ男湯と女湯で別れた。

「ふう…極楽極楽。」

湯に浸って俺は体に付いた血を洗った。

周りには人がいないので叫ばれることもない。

血の臭いを消してから、俺は番台に立つ。

「臭う?」

「いんや。うちの風呂はいつも綺麗にしてるから大丈夫さ。」

「嘘言え、風呂の湯変えるの三日に一回って聞いたぜ。」

「…仕方ないじゃないか。此処等はそんなに来る人間はいないんだから。」

ミサバあちゃんが言うように俺達の住む街は貧しい人間が多い。というかほぼ貧しい人間だ。

この国はそれなりに面積があり、二十の街でわかれている。一番街は金持ちや政治家が暮らし、二十番街は犯罪者達が暮らす。

つまり街の番地の数が多いほどにその街の治安が悪くなる仕組みだ。

俺の街は十六番街。まあ悪い方だ。だから多少事件が起きてても誰も驚いたりしない。

「お待たせ。」

「おう。」

「アリアと一緒に家…もとい店に戻る。」

「まだシュウのこと疑ってんのか？」

「…甘すぎるよ、皆…。」

「そう言っただけで店の扉を開けるとシュウがソファで眠っていた。」

「アリア、店が綺麗になってる。」

「…。」

「シュウが一人で掃除したみたいだな。」

何も言わずにアリアは二階から毛布を持ってきてシュウに掛けてやった。

「…んー。」

ムクリとシュウが起き上がった。

「おはよーシュウ。」

「アオ…おかえり。」

「フニヤと寝惚け気味にシュウは言った。」

「…ただいま。」

おかえり、なんて久しぶりに言われた気がする。正直少し照れ臭い。

「帰ったのはアオだけ？」

「いや？アリアも一緒。」

俺が後ろを指差すとシュウの視線がそっちに動く。複雑そうな顔をしているアリアの姿に。

「その毛布もアリアが掛けたんだぜ？」

「後ろから殺気がするがそこはあえて気にしないことにした。」

「…ありがとう。」

シュウはへニヤリと頼りなさそうに微笑む。

「…別に。」

そつぽを向いてアリアは答えた。素直じゃねえな。

「あ、お客さんが来たんだよ。」

「客？」

俺とアリアは顔を見合わせた。

それを気にする風でもなく、シュウは封筒を差し出した。

「お爺さんが持ってきたんだ。仕事の報酬だつて。」

「…そつか。」

依頼人

その単語が頭によぎる。

「何か言われた？」

アリアが尋ねた。こいつが興味持つなんて珍しいな…

「ううん。特には…」

俺は少しホツとしていた。…関わらせたくないのかもしれない。

シュウはまだ汚れを知らないから。

「ただいまー。」

「カイさん、おかえりなさい。」

「デネさんが来たんだつて？」

「デネさん？」

シュウは知らないだろうが、俺やアリアはよく知っている。依頼人の常連で一番街に住む金持ちだ。

「封筒を渡してあるつて聞いたけど…」

「これ。さつきシュウから渡された。」

カイは中から札束を出して数え始めた。

「うん、ちゃんとあるね。シュウ。」

「はい？」

「留守番ご苦労様。今から君は本当に俺達の仲間だ。」

…今から？

「おい、カイ！！シユウを信用してなかったのかよ！！」

「いや？ただお金を盗まれてたら仲間には出来ないからね。」

確かにそうだけど、納得がいかない。俺が口を尖らせていると

「僕、皆と仲間になれたんだね。」

「ああ、そうだな…。」

「良かった！！」

笑顔のシユウに怒りも忘れてしまった。

「よろしくね、アオ。」

「…おう！！」

こうして、俺に仲間がまた一人増えたんだ。

第3話（後書き）

すみません、更新がかなり不定期になってます。

二日に一度のペースになれそうです、未熟ですが楽しみにしててください。

今回は再びシュウの視点に戻ります。老父も再登場し、話をかき回していく予定です。

Delivery children.

Delivery children.

第4話（前書き）

今回はシユウの視点です。

第4話

「いらつしやいませ。」

僕が骨董屋に住み込みを初めてから一週間が経った。

国の現状や街の治安の話も聞いて、少しずつ生活に慣れたころ

「やあ、シユウ君。」

「デネさん……。」

一週間前に顔をあわせた老父、デネさんがやってきたのだ。

「嬉しいな、名前を覚えてくれたんだね。」

「仕事の常連さんだつて聞いたから……。」

「そうかい。いつもカイ達にはお世話になっているよ。今日も皆は仕事かな？」

デネさんの問いに僕は頷いた。

「そうか、忙しそうだね。」

それに引き換え、僕は暇だ。三日に一度くらいしか来客はいないのだから。

ただ、最近僕は本を読み始めた。少しでも失った記憶を戻そうと新たな知識を埋める。

その結果からか、僕は料理が作れるようになった。なぜか料理本は見っていて楽しいのだ。まだ簡単なものばかりだが、味はアオ達に誉めてもらえる。

「今日は何のご用ですか？」

「うん、骨董品を見にきたんだ。」

僕は驚いて固まる。

今までの客は全てカイさん達の客だったからだ。

「勝手に見ても良いかな？」

「は、はい。」

デネさんはのんびりと品物を見ている。僕はそれを眺めて時が過ぎるのを待った。

「シユウ君。君のおすすめする品物はどれだい？」

「えっ……」

試されているのだろうか。しかし、自分に芸術等のセンスは無いのでただ単に気に入っている絵画を選んだ。

「ほう……『青い海と空の境目』か。」

デネさんは少し意外そうな顔をしていた。

「なかなか良い目を持ってるじゃないか。」

「はあ……。」

よく分からなくて曖昧に返事をしていた。

「シユウ君には過去の記憶が無いって聞いたんだが……？」

「そうです。」

質問の意図がわからずに僕は頷いた。

「どうだろう、私の家に来ないかい？」

「……え？」

「シユウ君は養子という言葉を知ってるかな？」

僕は頭を横に振った。

「血の繋がりがなくても家族になれるんだ。私の家族にならないか？」

「……僕の家族は、アオとアリアとカイさんです。」

それ以外今の僕には考えられない。

「……そうか。変なことを言っただけだね。」

また来るよ、と言ってデネさんは帰っていった。

「今日は客来たー？」

夕飯を作る僕の後ろでアオが尋ねてきた。

「…うん、来なかったよ。」

デネさんが来たことを、僕は誰にも言えなかった。

「そっかあ…ま、明日なら誰か来るだろ。」

「うん。」

「アオ、洗濯畳むの手伝って。」

「げっ！！アリアが呼んでる…。ちょっと行ってくるな。夕飯、楽

しみにしてるから。」

「うん。」

アオはいつもと同じように接してくれる。勿論アリアやカイさんも。

僕はずっと此処にいたいと思ってる。でも…気になるのは三人の仕事。

たまに怪我して帰ってくるのはなんとなく気付いている。

アオ達は何も言わない。だから聞くのが怖いんだ。

「旨い！！さすがシユウだな。」

「ありがとう。」

アオはいつもはつきり物事を伝えてくれる。…時々こっちが恥ずかしくなるくらい。

「…。」

「…。」

アリアとカイさんはほとんど無言で食事をする。

でも毎回綺麗にご飯を食べてくれる。もし多少失敗したとしても。

「…ごめん、電話だ。」

カイさんは立ち上がって奥の部屋に行ってしまった。彼にいきなり電話が来るのは日常茶飯事だ。

「また依頼かしら。」

「…さあ。」

「…。」

つまりなさそうにアリアとアオが言う。

僕には黙っていることしか出来なかった。

「シユウ、ちよつと良いかな。」

「？」

僕はカイさんに連れられて奥の小部屋に入った。

「単刀直入に聞くよ。今日デネさんが来たんだらう？」

「…何で…」

わかつたんだらう。僕の思考は止まりかけた。

「さっきの電話、デネさんからだったんだ。」

そこまで言っただけの僕の目の高さに合わせてようとカイさんは屈む。

「養子の話、されたの？」

「…。」

僕はコクンと頷いた。

「そっか…」

そのとき

カタン…と何か落ちる音がした。振り返ると扉の近くに包みに入った飴玉が転がっていた。

普段飴玉を常備している人間を、僕はただ一人しか知らない。

「アオ！！」

小部屋から身を乗り出して僕が大声で叫んだ。でもそこにはアオはいない。

「アオはどこ？」

台所で片付けをしていたアリアに尋ねる。

「二階に上がっていったけど…」

その言葉を聞いてすぐに階段を駆け上がり、僕はアオの部屋を勢いよく開けた。

「…何だよ。」

真つ暗な部屋の中からアオの声が聞こえたけど、いつもより数段低く冷たい声だった。

僕は背中が少し寒くなったが、ゆっくり呼吸してから口を開いた。

「話…聞いた？」

「何の。」

「カイさんと話してた…」

「…何で嘘ついたんだよ。」

「え？」

「さつき俺聞いたよな？客来たか、つて。何で本当のこと言わなかったんだよ。」

バサバサと本が崩れ落ちる音がした。物に八つ当たりしているようだ。

「…つたの？」

「あ？」

「言ったらどうなったの？何か変わる？」

いつの間にか僕の口は勝手にしゃべっていた。

「シュウ…？」

アオの瞳が僕を映す。それは少し動揺して見えた。

「…此処にいたいから、だから黙ってたのに…!!」

「おい、シュウ…!!」

Delivery children.

た。
頭の中が真っ白になって、泣きそうになって…僕は店を飛び出し

Delivery children.

第4話（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

次回はアリアの視点で書いていきます。

ミサバあちゃん（銭湯のおばあちゃん）が出てくるのでその辺も楽しみにしていただけると嬉しいです。

Delivery children.

第5話（前書き）

今回はアリアの視点です。どうぞお楽しみください。

第5話

「シュウ、どこ行く…」

私の言葉は届かなかったみたいだ。

二階から降りてきたシュウは一直線に外へ向かっていった。

大声でアオと喧嘩するような声を聞いたけど、それすら珍しいと思う。協調性を大切にする正直な人間。それが一週間シュウと過ごして私が感じた人間性だったから。

「アリア!!シュウは?」

「出ていったけど…喧嘩でもしたの?」

アオから大体の話を聞いて、カイのいる部屋に足を進めた。

「…俺は仲間の話を立ち聞きして良いなんて言った覚えはないよ?」

冷やかな態度のカイにうつ向いて黙っているアオ。カイに攻められるときのアオはいつもこうなる。

「とにかくシュウを探そう。予報では雨が降るらしいから。」

私達はバラバラに分かれてシュウを探すことにした。

「俺はあっちを探す。アオは向こう、アリアはこっちを頼む。一時
間後には必ず此処に帰ってくるんだ。」

「わかった。」

「…。」

アオは何も言わずに走り出した。それほどシュウが心配なんだろう。

私も走った。息を切らしながら必死に。

「ハア…ハアツ…。」

しかしシュウの姿はなかなか見えず、気持ちが焦るばかりだ。

「どこ行つたのよ…。」

傘越しに空を見上げる。雨が少しずつ強くなっていた。

ふと冷静になると、一週間しか一緒にいなかった人間をここまで心配するのは私にとって初めてのこともかもしれない。

それほどに、シュウは真っ直ぐで優しかった。

私は銭湯が近くにあることに気付いた。

もうすぐタイムリミット 私は最後の希望を託すことにした。

「ミサばあちゃん…！」

「あん？」

ポーツとしていたのか間延びした返事があった。

「黒い髪の子と同じくらいの子の身長の子見なかった？」

「…ん。」

ミサばあちゃんは渋い顔で男湯の方を指差した。

「？」

「…前で蹲ってるのを見付けたんだ。今は寝てるよ。」

その言葉を聞いて多少驚きつつも私の足は脱衣所に向かった。

「…。」

確かにシュウがいた。眠っている顔を見ると、頬と睫が濡れているのに気付く。

「…アオが心配してるよ。」

寝ているシュウへ向けてポツリと呟く。

「…僕、皆と一緒にいたかったんだ。」

「うん。」

起きてたんだ、と思いながらも私は頷いた。

「何でアオはあんなに怒ったのかな…。」

「…アオは馬鹿みたいに単純だから、嘘つかれたのが嫌だったんじゃない？それに…」

「それに？」

「突然シュウがいなくなるんじゃないかって心配してんのよ。」

「……。」

「今も必死に探してる。」

時計を見れば一時間を過ぎていた。アオもカイも店に戻ってるはずだ。

「ほら、帰るわよ。」

私はシュウの手を引く。

「うん…。」

ミサばあちゃんにお礼を言い、私とアオは店まで帰ってきた。店の前に立つと、シュウの足が急に止まった。

「？」

「アリア、迎えに来てくれてありがとう。」

シュウが私に微笑む。

「…別に。」

お礼の言葉なんか滅多に聞かないから、答え方なんてわからない。意地っ張りな返事にも満足そうなシュウを見て、私は尋ねる。

「何でそんな嬉しそうなの？」

「だって、アリアの『別に』は『どういたしまして』ってことですよ？」

そう言うてはにかむシュウに私の胸は小さく高鳴ってしまった。…本当に少しだけ。

「シュウ!…」

「うわっ！！ア、アオ…」

店に入ってアオがシュウを見た途端、勢いよくアオはシュウに抱きついた。私とカイは眺めるだけ。私はともかく、カイが二人の輪に入ったら…変だ。

「く、苦しいよアオ…」

「あ、悪い…」

慌ててシュウからアオは離れた。シュウはケホケホと咳き込んでいる。

「あの、さつきは怒鳴ってごめんね？」

「何言ってるんだよ！！俺が先に怒ったんだから。」

「…ま、二人の喧嘩に巻き込まれた俺達にも謝罪は必要だと思うよ？」

「あ…」

「う、ごめんなさい…」

カイの一言で二人は頭を下げた。

その日、私達四人の絆はもっと強くなった気がした。

…絆なんて、簡単に言える言葉じゃないけど。

そして同日、ある場所では

「…まだ見付からないのか。」

男は唸るような声で背にいる部下に尋ねていた。

「はっ、目下捜索中です。しかし…この国は相当広いですから…」

冷や汗を流しながら部下は言った。

「探せないというのか？」

「め、滅相もございませ…!!」

部下の口から、その言葉の続きを聞くことは出来なかった。自らの血で服が朱色に染まり、息の音はもうなかったからだ。

「トマ、新しい服を持って来い。あの男の血で汚れてしまった。酷く不快そうに男は言う。」

「ハイ、カシコマリマシタ。」

隠れるように物陰にいたシュウ達と同年くらいの少年トマは機械的な声で答えた後、カタカタと体を鳴らして奥の部屋に消えていった。

「トマももうすぐ故障だな…そろそろ新たなモノを作らねば。」

テーブルに置かれたワインを一気に飲み干し、男はニヤリと笑みを浮かべた。

「早くお前に会いたいよ。」

意味深げな言葉を呟いて

Delivery children.

第5話(後書き)

Delivery children.

第6話（前書き）

このお話はシユウの視点です。

第6話

「おや、お使いかい？」

「ミサおばあちゃん。うん、夕飯の買い出しなんだ。」

アオとの喧嘩から数週間が経ち、僕はミサおばあちゃんとも仲良くなった。

おばあちゃんは銭湯の前を掃いている。

「偉いねえ。アオ達は？」

「仕事行つた。」

「そうかい…シユウ、今時間はあるの？」

「？うん、まあ…」

僕は予定より買い物早く終わったので暇を持て余していたところだった。

「良いものあげるからお入り。」

おばあちゃんに連れられて、中に入る。

床はひんやりしていて歩き疲れた足に気持ち良かつた。

「ほら、コーヒー牛乳。賞味期限前だから心配ないよ。」

「ありがとう！！」

初めて飲んだそれは甘くて美味しかった。

「また遊びにおいで。」

「うん、またね！！」

少しおしゃべりした後、僕は自分の家に帰つた。

「…あの子はまだ血の臭いが無い。仕事を知らない証拠さね。」
小さくおばあちゃんが呟いていたのを僕は知らなかった。

「…まだ誰も帰ってない。」

前もって渡されていた合鍵を回して鍵を開く。

「ひっ…!!」

無人だと思っていた僕の目に真っ赤な血が床に広がってているのが飛込んできた。

「だ、誰かいるの…!？」

駄目だ

声が震えて思うように大声が出ない。

僕は血の行方が奥の部屋に向かっていているのを見付けてそこへ忍び寄る。

「……。」

心臓の音がやけにうるさかった。周りに聞こえちゃうんじゃないかと思うくらい。

部屋にいたのは見たことのない男の背中だった。

青みがかつたくせつ毛の黒髪に体格はかなり大柄だ。カイさんの

二人分くらいに見える。

「誰？」

「…!!」

驚きと焦りの入り混じった物凄い形相でこちらを振り向く。

「お前も運び屋か…?」

僕は体中から冷や汗が出た、水分が全部なくなるくらいに。それほど相手は恐かった。

「…っ。」

「どうなんだ、早く答える。」

男の手には血まみれの包丁。よく見れば利腕の袖がが切れ、かな

りの量の血が滲んでいる。

「違…、僕は一緒に住んでるだけで…。」

口の中が渴いて上手くしゃべれない。

「…同居人か。」

「う、ん…。」

「ならお前も同罪…!!」

気が狂ったかのように髪を振り乱し、一直線に僕のところに向かってくる男。

「…っ!!」

恐怖に震えて足が動かない。声も奥に引っ込んでしまった。

殺される　そう思った瞬間、轟音が後ろから聞こえた。

白煙が見える。変わった匂いが鼻につく。

「ぐっ…!!」

ガクンと男が倒れた。口からは血が流れ、痛そうに腹を抱えている。そこからはボタバタと血が落ちていた。

撃たれた、僕がそう気付くまで数秒かった。

「クソ…!! 此処で死んでたまるか…!!」

苦々しげに呟いたが、男は膝から崩れ落ちて呼吸を止めた。

「あ…あ…。」

腰が抜けてペタンと尻餅をついた。

男の血がこちらに向かって流れてきて、慌てて僕は後退する。

そして、『何か』にぶつかつた。

振り向くべきなんだろう。でも今振り向いたら、これまでの生活が壊れる気がした。

なぜなら、後ろにいる人物の匂いを僕は知っていたから。

「…。」

「…大丈夫、か？」

僕は体育座りをして膝に顔を埋めた。

悲しいことに、僕の予想は間違つてない。それはいつも僕を支えてくれる大切な仲間だ。

「…何で？ねえ何で…」

後ろに立っている人物に背を向けたまま尋ねる。面と向かって話す勇気が僕にはなかった。

それどころか、頭が混乱して言葉に詰まる。

「……………」

相手は何も答えてはくれない。

カタン…と固い何かが落ちる音を聞いた。おそらく、それで男を撃ち殺したんだろう。

「ねえ、答えてよ…………アオ……………」

このとき、僕は初めて泣いた。

第6話（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

次回はアオ目線で書きます。シュウが買い物に行ってる間に起っていたところから始まります。

Delivery children.

Delivery children.

第7話（前書き）

今回アオ視点です。
あとがきにお知らせがあります。

第7話

俺は仕事の途中だった。内容は盗まれた麻薬を取り返すこと。簡単に言えば、ヤクザの仲間割れだ。

「めんどくせー。」

「横で文句言わないでくれる？」

アリアの不機嫌そうな声が聞こえる。俺が睨みつけると

「そこまでにしときな。もう敵地の前だ。」

カイが間に入る。敵地は古びた倉庫だった。

「相手は三人だけ。だからノルマは一人ずつだ。」

仕事では毎回ノルマが与えられる。

正直俺は何人でも良いんだけど、カイは数えられるくらい冷静沈着になってほしいらしい。

「良い？」

扉の前に立つ。

「うん。」

「おう。」

俺達は扉を蹴破って中に入った。

「うわ…」

「最悪。」

「うーん…困ったなあ。」

上から俺、アリア、カイの順に言った。

状況は最悪だ。目的の麻薬は袋が開いて落ちていて、その隣には男三人が横たわっている。

「全部使っちゃまったのか？」

「そうみたいね。」

「麻薬の過剰摂取はマズいな……」

カイの言葉とともに男達が立ち上がる。

「ようやく来たな、運び屋……」

中毒症状のせいか、見事に舌が回ってない。

「あんたら俺達のこと知ってんの？」

「…龍白組を覚えているか。」

「龍白？」

「この前仕事で潰した組よ。」

アリアの言葉に記憶を巡らせ、ああ…、と思い出す。

「俺達はその生き残りだ。」

ニヤリと気持ち悪い笑顔を浮かべる男達。

「生き残り…単にその場にいらなくて生き延びただけじゃなくて？」

「…違う。」

アリアの質問に複雑そうな顔になった。

「凶星かよ……」

「俺達は潰れた組を直そうと一度だけ考えた。だが俺達の居場所は

あそこしかない。」

話が勝手に進んでいく。

「なら華々しく散る。お前らをブツ殺して……!!」

そう言った瞬間、男の一人が俺に殴りかかってきた。他の二人も

カイ達に襲いかかる。

けど、どいつも麻薬の快楽からか動きが鈍い。

「…っと。」

楽に避けて銃を放つ。

「ぐっ……!!」

右腕に命中、したはずだったのに

「痛くねえ…全然痛くねえよ……。」

「は……」

ポタポタというよりダラダラと血が流れている。それにも関わらず、撃たれた男は目をギラつかせて平然としている。

俺はそれに動揺した。近付いてくる男に後退しかできない。

「しっかりしろ!!」

怒鳴り声が俺の耳の奥を貫く。体はビクツと波打つ。

その声は普段滅多に感情を乱さないカイのものだった。

「へっ、やっぱガキだな。」

「はっ、そのガキに撃たれたのはどこのどいつだよ……!!」

男を黙らせようとして殴りかかる。

「うっ……くそ!!」

「あ!!」

男が逃げ出した。カイとアリアを見るとまだ戦ってる。

カイはこちらを一瞬見て、

「行け」

と言ったように見えた。

頷いて俺は外に出た。

「来たな。」

「……何だ、外でやりたかったの?」

意外なことに、男が外で待っていた。

「くっくっくっ……。」

軽く笑みを見せてから男は走り出す。俺はすぐに追い掛けた。

どれくらい走っただろう。気のせいだと思っていたことが現実になろうとしている。

「ハアツ……!!おいコラ!!どこまで行く気だよ!!」

「ひやははは……!!」

答えない男に舌打ちして足を速める。

「…あのデブ…。」

俺の予感は現実になった。男が逃げ込んだのは俺達の家。注意深くドアを開けて銃を構える。

「コラ豚！！人ん家上がり込んで何考えてんだ！！」

俺の声に相手は答えなかった。

銃を持ち直して、俺は二階から調べることにした。

「いない…」

二階には誰もいなかった。緊張を少しだけ緩めた途端に…一階から物音がした。

「……。」

何か忘れてないか？

俺は思考を巡らす。頭に浮かんだのはシュウの顔。

「シュウ…！！」

慌てて階段を駆け降りた。一階に行けば音は更に大きく聞こえる。逸る気持ちを押さえ込み、奥の部屋に向かった。

シュウは男と向かい合っていた。相手の目がもう正気でないことはシュウにもわかったと思う。

男に見えないように引き金に手をかける。

そこでふと妙な感覚が俺を襲った。

シユウに自分が人殺しだとバレても良いのか？

「…っ。」

俺の答えはN oだ。初めて出来た同性の親友をなくしてしまうかもしれない。

「ならお前も同罪…!!」

「…っ!!」

男がシユウに襲いかかる。

無意識の内に俺は勢いよく引き金を引いた。心臓ど真ん中めがけて。

「クソ…!!」

撃たれた場所は心臓付近。恨めしそうにこちらを睨んでいたが、やがて動かなくなった。

撃った部分から紅い血が流れる。

「大丈夫、か？」

柄にもなく声が震えていた。

シユウの体がビクリと跳ねる。

「…何で？ねえ何で…」

背を向けたまま俺に尋ねてくるシユウ。

俺は何も言えなかった。手から銃が滑り落ちる。

「ねえ、答えてよ…アオ…」

すすり泣く声を聞いた。

それだけで、俺の頭は真っ白になった。

気が付けば俺は自分の部屋のベッドにいた。

「……。」

妙な虚無感が身体中を渦巻く。

「ドアの開く音に俺は体を起こした。少しだけめまいがする。起きたの？」

「…おう。」

「アリアが濡れたタオルを持ってきた。」

「…熱があつたの。」

「…シユウは…？」

「声がかすれる。」

「…これ。」

「アリアが差し出したのは手紙。」

「しばらくミサバあちゃんのところにいるって。」

「…いだ。」

「？」

「俺のせいだ…」

「両腕で顔を隠す。」

「アオ…」

「目の前で殺さなかったら…シユウは俺が人殺しなんて知らずにすんだのに…」

「……。」

「複雑そうな表情で俺を見ているアリア。」

「俺はベッドから出ようと体を動かす。」

「ちよっ…何してんの…！？」

「決まってるんだろ、シユウのところに…」

「馬鹿言わないで！！熱があるって言うてるでしょ！？」

「アリアが俺を押し止めるが、それを振り払ってベッドから離れる。その瞬間カクツと膝から崩れ落ちた。」

「アオ！！」

「ごほごほっ…！！」

「急に咳き込んでくる。頭がポーツとしてきた。」

Delivery children.

「カイ!!」
遠のく意識の中で、アリアがカイを呼ぶ声だけが聞こえていた。

第7話（後書き）

いつも読んでくださりありがとうございます。

お知らせなんですけど、しばらく実生活の方が忙しくなってしまうので、次回の話が二月頃になってしまいます。

勝手な理由で申し訳ありません。

これからもどうぞよろしくお願いいたします。

Delivery children.

第8話（前書き）

長らくお待たせして申し訳ありませんでした。更新再開致します。

ちなみに主人公シュウの視点です。

Delivery children.

第8話

Delivery children.

「これ飲みな。」

「……ありがとう。」

みんな手紙、読んでくれたかな……。

僕はミサおばあちゃんの家……銭湯にいた。

「あんたも人を殺したのかい？」

ホットミルクを作ってくれたミサおばあちゃんは僕の隣に座る。

「血の臭いがする。」

「違うよ……！……僕は誰も……」

僕はまた泣きそうになった。

あのとときのアオは、いつものアオじゃなかった。

「ならアオ達の仕業かい。」

「……おばあちゃん、知ってたの？」

「そりゃああんたより付き合いは長いからね。」

所々抜け落ちた歯を見せてミサおばあちゃんは笑う。

「……人殺しは犯罪だよ……。」

「まあ、その意見は正しいさ……此処が一番街ならね。」

「……？」

「此処は十六番街だ。治安の悪さは聞いてるだろ？」

僕は頷いた。カイさんに何度も教えられたのだから。

「此処は人を殺さなきゃ自分が殺されるような街だ。」

「そんなの……」

「現に、お前は助けられたんじゃないのかい？」

「……。」

確かに、僕は命拾いした。でも他人を殺してまで僕は生きていて良いのだろうか。

「まあ、それが嫌ならこの街からいなくなった方が賢明だがね。此処でよく考えな。いたければずっといても構わないさ。」
「…うん…。」

何時間経っただろう。

膝を抱え、背を丸めて僕は考えていた。

「シユウ。」

名前を呼ばれて上を向けば

「…カイさん。」

いつも通り微笑む、カイさんの姿があった。

「手紙読んだよ。」

「……。」

「見たんだってね、アオが撃ったところを。」

勝手に心音が高鳴る。

数時間前の情景が頭に浮かんできて、それを振り払うように僕は首を大きく振った。

「…アオがね、本当は来たかったみたいなんだけど…今熱が出てて。」

「…熱？」

あのときいきなり倒れた意味がようやくわかった。それと同時にアオの様子が気になる。

「心配いらないよ、アリアが看病してるから。」

「うん…。」

無意識に僕は聞きたかったことを聞いていた。

「カイさんは、この街が好き？」

「俺？うん、好きだよ。」

「誰かを殺さなきゃいけない街でも？」

「うん。」

目を伏せたままカイさんは答えた。

「自分らしくいられる気がするんだ。此処なら。」

「自分らしく…？」

「…シユウはこの街で人が死んでもニューヨークにならないことに気付いてた？」

僕は首を横に振る。

「一番街の人間は誰もがニューヨークになるよ。」

そう言われるとそうだった気がする。死んだと報道されるのは丸々太った人間ばかりだった。

「そんなぬるま湯みたいなかで暮らすなんて、生きてる実感がないと思うんだ。」

「……。」

「此処なら人間らしく生きられる。例えば罪を作ったとしてもね。」

僕は何も言えなかった。

「人は生まれたときから何らかの罪を背負う運命にあるんだ。それが重いと感じるか軽いと感じるか…そこは自分にしかわからないわけ。」

「…うん。」

「アオもアリアも、進んで罪を重ねることはしないさ。」

「……。」

僕は自分の考えが間違っていた気がする。

アオ達はテレビで偉そうに語る一番街の人よりずっと人間らしいと思った。

「カイさん、帰る？」

僕の居場所はあそこしかない。…というよりこれから皆と一緒にいたい。

「わかった。その前にミサバあと少し話してくるからちょっと待っててね。」
「うん。」

僕とカイさんは並んで歩いた。

両手には数本のコーヒー牛乳。ミサおばあちゃんがくれたのだ。

「シユウはミサバあに気に入られてるね。」

「そうなの？」

「うん、俺初めてお土産もらった。」

「ふーん。」

そっけない返事をしたけど、内心嬉しくてしょうがなかった。

店に戻ると水の入った洗面器を持つアリアに迎えられた。

「様子はどう？」

「だいぶ熱下がったみたい。…シユウ。」

「…？」

「これ持ってって。」

なかば強引に洗面器を渡される。

「わかった。」

中の水を溢さないよう、慎重に階上に向かった。

「…失礼します…。」

アオを起こさないように静かにドアを開けた。

顔を見てみると額に汗がうつすら滲んでいるのがわかった。

「……………」

額に濡れタオルを乗せてやる。冷たかったのか、眉間にシワを寄せて目を開けた。

「…シユウ…？」

寝起きであることも重なり、声がかすれている。

「風邪、大丈夫？」

「…ごめんな。」

「え？」

僕の問いを無視してアオは謝罪の言葉を述べた。

「俺、人殺しだ。ずっと黙っててシユウを騙してた。」

アオは僕に顔を見せようとしめない。両腕で顔を隠している。

「…ううん。全部ひっくるめてアオなんだから。僕はそんなアオと友達で嬉しいよ。」

これは本心だ。アオに拾われて良かったと思う。

「シユウ…」

「ただし。」

僕は怒った表情をした。

「？」

「もう嘘つかないで。」

「…わかった。」

「あと、アリアとカイさんもね。」

アオの部屋のドアを見つめて言う。部屋の主は少し驚いた顔をしていた。

ドアが開いて複雑そうなアリアと苦笑いしたカイさんが現れた。

「よくわかったね。」

「…なんとなくだけどね。」

「お粥作ったから持って来たの。」

鍋に入ったまま持って来たようだ。中を覗けばそれはかなりの量

Delivery children.

が入っている。

「…こんなに食べるの？」

「無茶言っなよ。」

まだ体がだるいのか、僕の問いに答えてアオはベッドに沈んだ。

「作りすぎたんだ。」

「だから夕飯は皆お粥ね？」

その後、アオの部屋でお粥を食べた。

こんな楽しい生活がずっと続くと思ってた。でもそれは、僕の勝手な思いだったのかもしれない。

第8話（後書き）

更新再開です。これからもこの小説をよろしくお願いします。

あと、次回はカイの視点です。

Delivery children.

Delivery children.

第9話（前書き）

今回はカイ視点です。

第9話

「今日も仕事なの？」

「みたいね。」

「最近多くねえか？カイ。」

「んー…新規の客も増えてきたからね。」

いきなりアオに話を振られて俺は着替えていた手を止めた。

アリアもアオも闇に溶けるような黒服に既に身を包んでいる。

「じゃあ帰り遅いんだね。」

寂しそうにシュウが言う。例えるなら捨てられた子犬だろう。

彼はもう俺達の仕事のことを受け止めている。

そのため堂々と仕事の話が出来るようになった。

「出来るだけ早く終わらせてくつから待ってるよ。」

「そういうアオが一番遅いのよ。」

「ああ？」

いつものようにアオとアリアの口喧嘩が始まる。間に挟まれるシュウはいつも不憫に思えるが、それよりも見ていて面白いという感情の方が勝っている。

「カ、カイさんー…。」

放っておいても良いのだが、シュウの困りはてた声にいつも小さく笑みを溢し、助けを出してしまう。

「今日は時間が制限されてるからそこまでしな？」
「制限？」

「モノが町に見回りに来るのが22時〜24時なんだ。」
「その間に仕事ってわけね。」
「そついうこと。」

「あ…。」

シユウが窓の外を見て声をあげた。

「どうかした？」

「今日雨が降るよ。」

「雨？」

「こんな晴れてるのに？」

アオとアリアが不思議そうにシユウを見つめる。

「うん。たぶん三人の仕事…」

シユウは澄みきった瞳で言う。

それを見た俺達は雨具を携えて家を出ることにした。

「あ、おかえりなさい。」

仕事から帰るとシユウがソファに座って待っていた。

勿論仕事は成功に終わっている。

…そしてシユウの宣言通り、雨は降った。この子は直感が当たるのだろうか。俺の謎は深まっていく。

「シユウまだ寝てなかったの？」

「うん、皆が怪我してないか確かめてから寝よつと思って。」

両手には救急箱が用意されている。

「俺らが怪我するわけねえじゃん!..!」

「アオは調子に乗り過ぎだね。」

俺は軽くアオの頭を叩いた。仕事で危なっかしいのはダントツでアオなのだから。

笑顔が溢れていた中で、俺の携帯電話が震えた。

画面には「常連1」の文字　　デネさんだ。

「ちよつとごめんね。」

俺はそこから離れた。

「もしもし。」

『こんな時間にすまないね。』

「一番迷惑だったのは日の出前に連絡してきたときですかね。」

電話越しに笑い声が聞こえる。

俺にとつては笑い事ではない。本当にあのときは眠くて仕方なかったのだから。

「で、用件の方は？」

「……。」

「また殺しですか？」

電話の主は重い口を開いた。

「内密に話したい。君の意見を聞きたいんだ。」

意見を求められたのは珍しいことだった。

「…何かをつかんだんですか？」

「…電話だと何もしゃべれない。君は一番街に来たことはあるかい？」

「月に一度行ってますから。」

依頼人は大半が一番街なのだ。

「なら明日、一番街を適当に歩いててくれ。こちらが車で探す。」

「…わかりました。」

電話を切ると

「電話誰から？」

アリアがドアに寄りかかって立っていた。

「デネさん。明日一番街まで出かけてくるよ。」

「カイ、一番街行くのか？ならこれ買ってきて。」

アオが広げた雑誌には一番街の有名洋菓子店が載っていた。

さすが無類の甘党。俺はどちらかというと辛党なので、見ててあきれろくらいだ。

「…これ一箱一万円もするよ？」

心配そうなシユウ。

本当に心配りの出来る子だな、と感心してしまつた。

「だーいじょーぶー！仕事のギャラたんまりだから。」

…育て方を間違えた気がする。

横を見ればアリアも顔をしかめていた。

「そっか。カイさん、気をつけてね。」

アオの言葉に何故か納得したシユウの笑顔に俺は頷いて頭をぐしゃぐしゃと撫でてやった。

「…にしても、簡単に俺が見つかるのか？」

言われた通り一番街を散策する。この街では白髪頭が目立つので、黒い帽子を耳まで被っている。

ふらふらしていると黒い高級車が横に止まった。

「ずいぶん奥まで来たじゃないか。」

顔を出したのは常連のデネさん。紳士っぽいわりに殺しの仕事が多い客だ。

「わかりづらかったですか？」

「いや、君らしい。」

…質問の答えになつてない。

とりあえず俺は一台何千万の車に乗り込んだ。

「車の中で話しても構わないかな？」

「話すことがあるのは貴方ですから。俺にそれを決める権利はありませんよ。というか、最初からそのつもりだったんでしょう？」

俺の言葉にデネさんの眉がピクリと動く。

そんなわかりやすい怒りの態度を見せられても、俺は冷静だった。

「どうしてそう思うんだい？」

「十六番街にも新聞は届きますから。俺らの仕事の成果で良い生活ができてるのは拝見してます。」

「…確かに君達運び屋には感謝している。」

話の途中で疲れきった声が入った。構わず俺は話す。

「そんな政治家とこんな子供が一緒に喫茶店なんかに入ったらマス

コミの餌だ。」

「そのとおりだ。…早速だが、本題に入ろう。」

ゴクリと生唾を飲み込んだ。

この話を聞くためにここまで来たのだから。

「君はこの世界の雨をどう思う。」

「…雨、ですか。」

意外すぎる話に少々拍子抜けした。

「そう。人間に悪影響を与えるこの雨に対して。」

「過去の人間達の失敗でしょう？」

「私もそう思っていた。しかし、最近ある噂を耳にしたんだ。」

「…噂？」

「この雨は誰かが意図的に降らせてるらしい。」

「…まさか、何の利益があると言っんですか。」

唐突すぎる話に夏でもないのに汗が出てきた。

「それは私にもわからない。ただ言えるのは、この国にそんな人間がいるかもしれないということさ。」

「この国に？」

「統計的に見ても、この国のものが一番毒性が強い。始めに、この雨が発見されたのもここだ。」

俺は何も言えなかった。それほどまでに、目の前の政治家の話は強烈なものだった。

「君はそんなおとぎ話を信じるかね？」

「…以前一度だけ考えました。もし誰かが作ってたら…と。でも発見されたのは今から70年近く前のことです。現在も最初の雨を降らせた人間が生きているとは思えません。」

「その点は我々も考えた。そして研究は組織で行われているというのがこちらの結論だ。」

「…それなら多少は納得できます。けれど、そんな重要な話を俺に言っって良いんですか？」

「まずは一般人の意見が聞きたかった。私の裏を知る人間は運び屋くらいだからね。」

手を膝の上で組んでこちらを見る。

「こちらから聞いておいてすまないがそろそろ仕事に戻らなければならぬんだ。そこで頼みなんだが……」

「この件は内密に、でしょう？」

「ああ…頼むよ。」

「わかってます。」

車から降りてカイに頼まれた洋菓子を買って家まで帰る。

「…疲れたな。」

誰にもなく言う。辺りはすっかり暗くなっていた。

頭の中では今日の話が必死に整理されている。

「早く帰ろう。」

そうすれば大切な仲間が俺を待ってる。

自然と俺の足が早足になっていたのは闇に浮かんでいた月しか知らない。

第9話（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

次回はシユウ視点です。

少しだけ彼の中で変化のあるお話…になってると思いますので、
楽しみにしてください。

Delivery children.

Delivery children.

第10話(前書き)

今回はシユウの視点です。

第10話

僕は闇の中にいた。

アオに初めて会った日と同じ感覚に陥る。

「…誰か、いないの？」

返事はない。

ふと頭に映像が流れ込んできた。

「素晴らしい…お前は最高のニンゲンだ…!!」

「この薬で世の中は変わる。わかるか？」

「優しさなんて感情はこの世に必要ない。」

全て断片的で、声から推測するとしゃべっているのは同一人物だ。
ただ最後に聞いた声は……

「ニゲテ…キミハココニイテイニンゲンジャナイ。」
泣きたくなるくらい懐かしい声だった。

「シュウ、シュウ!!」

「ア、オ…?」

目を覚ました僕を待ってたのはアオだった。

「大丈夫か?」

「うん…」

僕は現実でも泣いていた。止めようと頭で考えても体は言うことを聞かない。視界がずっとぼやけている。

何も言わずにアオはタオルを渡してくれた。

「怖い夢でも見たのか?」

「…よく、覚えてないや。」

「そつか。じゃあ寝直そうぜ?まだ夜中の二時だ。」

一つ大きな欠伸をしてアオはベッドに潜った。

夢の内容は覚えてる。でもアオには言えなかった。

あの人達は僕の何なんだろう……。

再びベッドに寝転んでも、僕は眠れなかった。

「…何、その顔。」

朝一でアリアから言われたその言葉は少なからず僕を傷つけた。

「眠れなかったんだ。」

食事用の四角テーブルにある椅子に力なく座る。

「ふーん…アオは?」

「まだ寝てる。」

僕が一階に降りようとしたときにはベッドからずり落ちていた。

彼は相当寝相が悪いらしい。僕と一緒に部屋になってからアオが規則正しい格好で寝ていたためしが無い。

「私、今日五番街まで行くんだけど何か欲しいものある？」
僕の向かいの椅子にアリアが座る。

「…五番街？アリア一人で？」

「そうだけど…」

「良いなあ…一人で遠くまで買い物。」

僕は十六番街…この街から出たことがなかったので、少しうらやましく思った。

「何買うの？」

「服とか色々。で、何か必要なものある？」

「うーん…本、かなあ。」

考えた末に出た答えはそんなものくらいだった。

「本？」

「この国の歴史とか知りたいんだ。」

今の僕には知らないことが多すぎるから。

「わかった。じゃあ行ってくる。」

「もう？」

時計を見れば、まだ七時前だった。日がようやく昇ってきたあたり。

「電車の乗り換えが多いから。今出ればちょうど良い時間に着くの。」

「へえー。」

「…ねえ、この服変？」

普段黒服の多いアリアだが、今日は紺色のワンピースと白いカーディガンという可愛らしい格好だった。

「ううん、似合ってるよ。」

「…ありがとう。」

綺麗に微笑むアリア。

それを見たとき僕の胸はとくん、と音をたてた。

「じゃあ行ってくるね。」

「…あ、うん。行ってらっしゃい。」

心を弾ませてアリアは出ていった。

「ふあ…。」

カイさんもアオも二階から降りてこない。

退屈のあまり僕は欠伸を繰り返す。

「…暇だな…。」

掃除も洗濯も済ませていたので、テーブルに顎を乗せて休憩する。

ふと今日見た夢を思い出した。

「最後の…機械みたいな声だったな。」

言葉が話せても人間以外の何かだったと思う。感情の無い声のよ
うな音。

すつきりしない、どこかモヤモヤした感情が僕の中で沸き起こる。

「ふあ…シユウ、はよー。」

僕が唸っていると欠伸をしながらアオが降りてきた。まだ眠そう
に目を擦っている。

「あ、おはよ。」

ふらふらしながら自分の椅子に座るアオ。

「何か飲む？」

「ココアがいい…。」

「はいはい。」

僕はキッチンに立ってココアをいれる。

「はい。」

「サンキュ。」

ぐいっとココアを喉に流し込むアオ。

「げほっ!!何だよこれ…!!」

アオは途端にむせる。

「これ?極苦ココア。眠気覚ましに最高だった。」

スーパ―で安売りしていたので買って見たのだ。

「苦…っ。」

「でも目は覚めたでしょ?」

「おま…先に苦いココアって言えばよ…!!」

「だって言ったら飲まないでしょ?」

アオは本当に素直な人間だと再確認した。

「……カイは?」

「まだ寝てるんじゃないかな。」

「ふーん……。」

ニヤリと意地悪そうな笑みを浮かべるアオの姿。

何かたくらんでるな…と僕が不安に思ったのは言うまでもない。

「二人ともおはよう。」

「あ、カイさん。おはようございます。」

「おはよーカイ。何か飲む?俺がいれてやるよ。」

「へえー、アオが?」

「勿論。」

無邪気に笑うアオ。

僕と同じことやろうとしてる。。

「じゃあココアが良いな。」

「了解！！シユウ手伝え！！」

「え、ちよつ…！！」

僕の返事も聞かずに無理矢理腕を引かれる。

「良いの？そんなことして…」

「大丈夫だって。」

すでに極苦ココアは用意されている。

「怒られても知らないからね？」

「別にいいよ？俺だけ騙されたなんてつまんねーもん。」

ケロリとそんなことを言っアオはカイさんの元へ。

僕はため息をついてからその後を追った。

「はい、アオ様特製ココア！！」

「ふーん…じゃあ早速、いただきます。」

ゴクンと一口、カイさんはココアを飲んだ。

「うっ…！！」

「カイさん！！」

うめいた姿を見て慌てて僕はカイさんに近寄る。

「騙されたな！！それはただのココアじゃない、その飲み物は…」

「極苦ココアだろ？」

ニツと何もかもわかっていたような顔を見せる。

「え……。」

その様子にあオが固まった。

正直僕も意外だった。

でもさつき気になることがあったが、それがたった今解決した。

「アオ。」

「？」

僕が呼ぶとアオの顔は動揺しなかった。

ここで僕の考えを発表してみよう。

「僕、あのココアを三日前に買ったんだ。」

「それが何だよ？」

「今日僕は初めてあのココア使ったんだ。でももう袋が開いててさ。」

「……は？」

あ、また固まった。

「だからたぶん……」

「そう。昨日も一昨日も俺はこれを飲んだんだよ。」

眠気覚ましにね、と続けて最上級の笑みを見せるカイさん。…逆に

に怖い。

「さて、アオ？向こうでちょっと話でもしようか。」

「お、俺これから用事が……」

冷や汗ダラダラのアオ。

だからやめとけって言ったのに……。

「そうなの？」

「…いえ、何もありません。」

その数分後にアオの叫び声があったのは僕と当人達だけしか知らない。

Delivery children.

Delivery children.

第10話（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

とうとう10話までいってしまいました…。あまり話は進んでないんですが、頑張って完結させたいと思います。

Delivery children.

第11話(前書き)

お出掛けしているマリマの視点です。

第11話

十六番街から十番街までの電車が約二時間。それに五番街までは一時間くらい電車で揺られる必要がある。
交通費は勿論、生活費は自腹だ。

カイによつて仕事の報酬はきちんと三等分されるから。それに対して私とアオはあまり賛成していない。大金を手にしても、使い道が無いのだから。

アオは細々ながらもお菓子等を買つて報酬を無理に使っている。そして

「……。」

服を買うためだけに私が此処まで来るわけがない。
五番街に行くのにはお金を減らすことと、もう一つだけ理由があった。

「…相変わらず大きな家。」

私の正面には十六番街にある普通の家の四つ分はある豪邸がそびえたっている。ただ豪邸と言っても、金持ちがそれなりにいる此処五番街では普通の家ではないのだ。

「家族三人と使いの人達だけでどれだけ広い家使うのかしらね。」
見上げる私の視線は険しく、もの寂しかったのだと思う。

…此処は私が生まれた家だから。

私は裕福な家で育った。初めの何年かは幸福なもので、その感情だけが私を支配していた。

…でもそれは終わりを告げた。新たな命が我が家にやってきたことで。

「可愛らしいわあ。」

「頭の良さそうな顔ねえ。」

もてはやされた妹。

私の嫉妬は日に日に大きくなった。

それにいち早く気付いたのは、母でも父でもなく……

「…アリアお嬢様？」

「…！！」

急に現実に戻された。

懐かしすぎる声に驚き、私は小さく息を飲んだ。

「やはり…お嬢様！！」

「…ルカ。」

嬉しそうに顔をほころばせて近寄ってきた老婆。

それが私の変化を一番に感じとった私の教育係、ルカだった。

「懐かしゅうございます…！！」

「うん、ホントに…」

あんまり変わってなくて良かった、と軽く息を漏らす。

「それで…今日はどのようなご用件で？」

「……見にきただけ。」
本当はポストにお金でも差し込んでおこうかと思っただが、ルカに会えたのでよしとした。

「じゃあ……。」

「あの、アリア様。此処に帰ってきたいのなら私の方から……。」
「いらない。」

先の言葉は聞く必要がない。帰りたから此処に来たんじゃないから。

「で、ですが……。」

「私にも大切なものが出来たの。この家とは正反対の形だけだね。」
私は元の我が家を見上げる。

「それに、捨てた娘の顔なんか見たくないでしょ。」
口を片方つり上げ、嘲笑した。

私の変化をルカは両親に相談した。相談された当人達は驚いたらしい。

気付かなかったとは、幸せな脳味噌だと私は今思う。

昔は大切な一人娘だった。しかし今は違う。そう考えた両親は私を十六番街に捨てた。

そのときの私には悲しいとか怒りとか、まったく出て来なくてただただ、むなしかった。

「……お変わりになられましたね。」

「……五年も経ったからね。」

「ルカは……ルカは祈っております。アリアお嬢様に幸せがあり続け

るよっ……」

涙声のルカ。

「……ありがとう。」

照れ臭くてルカに背を向けてお礼を言い、すぐにその場を走り去った。

捨てられた原因がルカでも、感謝している。私がこの家で一番安心出来たのは、ルカの隣だったから。

「あ…本屋行かなきゃ。」

思いきり走ったため体がほてる。

当初の目的を思い出し、適当に気に入った服を数着買ってから私は五番街で一番大きな書店に入った。

「……これで良いかな。」

少し厚めの本を買った。これなら読みごたえがありそうなので、シユウも喜ぶだろう。

また三時間かけて帰ろうと、駅に向かった。

そのとき

「君、ちよっと良いかな。」

「？」

知らない男に声をかけられた。

黒っぽいスーツに真っ黒なサングラスをかけた見るからに怪しい男だ。

「…何ですか。」

カバンに忍ばせた銃に触れる。

此処で撃つたら人目につくな…。

「そんな警戒しないで。今ちよっと人を探してるんだ。」

「はあ…。」

胡散臭いことに変わりはないと私は思った。

「君と同じくらい歳のね、こんな顔なんだけど…」

ひらりと写真を見せられた。

その瞬間、私の心臓がドクンと跳ね上がった。

「。。」

真つ黒な髪に澄んだ瞳。いつもと表情が違っけれど確実にそれは

シュウだった。

「知ってるのか？」

急かすように男が尋ねてくる。いつの間にかサングラスははずれていた。

「…似た友達がいるけど、その子女の子なの。」

勿論嘘だ。

「そうか…呼び止めて悪かった。」

男はサングラスをかけてどこかへ行ってしまった。

脈打つ心臓を必死に押さえ込み、カイに電話をかける。

「もしもし？」

「カイ？今時間ある？」

「大丈夫だけど…どうかした？」

普段冷静な私の声はそれをかけらも感じさせないくらい焦っていた。

「後で話すから…今から二時間後に、十番街で会える？」

「わかった。」

二時間後

「何かあったの？」

私とカイは十番街の喫茶店にいた。

「…シユウを、探してる人がいたの。」

「本当に？」

カイは目を丸くしている。心なしかシヨックを受けているようだ。

「写真見せられた。無表情だったから違和感あったけど、あれはシ

ユウだと思う。」

「……その探してる人に言った？うちにいるって。」

うつむいて私は首を横に振る。

「見るからに怪しそうな男だったから。それに五番街で探すなら二

ユースとか張り紙とか対処があっても良いはずなのに……」

「それがなかったわけだ。」

「うん……」

「シユウはどこかの組織の一員、今はそう考えるべきかな。」

「……。」

何とも言えずに、私は苦いカフェオレを口に運んだ。

「カイ、このことシユウには……」

「言うべきじゃないな。アオにも言わない方が良い。」

「馬鹿がつくくらい正直だからね。…それより、砂糖入れすぎじゃない？」

普通のカップに砂糖四杯。さすがに甘すぎる。

「考え事してるときには許されるんだよ。」

スプーンでぐるぐるかき混ぜ、平然とした顔でコーヒーを飲み込む。

「…見てて吐きそう。」

「さて、これから忙しくなるな。」

飲み干したカップを置いて指を組む。

「？」

「仕事＋シユウの調査と警護。」

「警護つて…何するの？」

「うーん、簡単に言えば発見防止かな。十六番街の人や依頼人にシユウの存在を口止めしたりするとか。」

「…それで大丈夫だと思うの？」

「何もやらないよりはマシでしょ。」

私が飲み終えたのを見てから、カイは立ち上がって会計に向かった。

「割り勘にしよう。」

「アリア、年上の男に恥かかせる気？」

「……。」

確かに端から見れば男はカツコ悪く見えるだろう。

喫茶店を出た後は互いに終始無言だった。

カイは仕事の依頼人達へ電話をかけまくっており、私はただそれを見つめるしかない。

「デネさんに電話かけてくれる？俺他にかきなきゃいけないから。」

「わかった。」

携帯を開いた途端、電話がかかってきた。

「誰から？」

「…アオ。」

何かお土産でも欲しいのかと思いつながら電話に出る。

「もしもしアオ？」

「シユウが…シユウが変なんだ…」

明らかにそう言った声は震えている。

「シユウが変…？」

「！！！」

シユウの名前を聞いて私とカイは過敏に反応した。

「何があったの？」

『夕飯の買い物から帰ってきたらすぐに部屋に閉じ籠ったんだ。呼んでも出てこなくて…今までそんなことなかったから…』

「すぐに帰るからアオはシユウの様子を見てて。」

強引に私の携帯を取り上げてカイはアオにそう言った。

「急いごう。」

「うん…！！！」

私達は急いで家に向かった。

Delivery children.

第12話(前書き)

シュウ視点です。

第12話

どうして、こうなっちゃったんだろう……。

「シュウー！おいシュウってば！！」

ドア越しのアオの声はくぐもっている。

でも今の僕には誰かと顔を会わせる勇気が無いんだ。

「。。」

自分がどんどんわからなくなっていく。

堪えきれずに僕は一人涙を流した。

「ねえねえ、夕飯何が良い？」

いつも通り夕飯の買い物へ行く。カイさんはアリアに呼ばれて出かけたので必然的に僕とアオが留守番をしている。

「んー、ケーキ。」

「わかった。」

「えっ、マジで？」

「アオの大好きなピーマンたっぷりの野菜炒め作るね？」

「げっ……！！」

アオは喜びから絶望へと表情を変えた。

アオはピーマンが大っ嫌いらしい。

「ケーキなんて冗談だから！！あ、ハンバーグ食いたいな！！」

あまりに必死なアオに僕は微笑んだ。

「はいはい、ハンバーグね。」

「……馬鹿にしてんだろ。」
ムスツとした顔でアオが睨んでくる。

「馬鹿になんてしてないよ。行ってくるねー!!」

「おー。」

「えっと肉は確か向こうだったな……。」
もう買い物や料理にも慣れた。

気が付けばすでにあの三人に出会ってから一ヶ月を過ぎていたのだ。

「あとは……うん、大丈夫。」

手早く会計を済ませてスーパーから出る。

空は厚い雲に覆われて、今にも泣き出しそうだった。

早く帰らないと……。

買い物袋を両腕に抱えて走り出す。

「ハアツ……ハアツ……!!」

周りの人はすでに傘をさし始めている。それが余計に僕を焦らせた。

「わ……っ!!」

否……焦り過ぎた。

家まであと少しのところまで僕は足を絡ませて転んでしまった。袋から玉葱が溢れ落ちる。

「いたた……。」

服の泥を払い落として転んだ部分を見た。

え？

声にならない驚きが僕を包む。

「何これ…」

傷からは鈍く光る銀色のものが見えた。

…血が出てない。それに人間の体内は銀色になったりしないはず

…。

僕は前に人間の体についての本を読んだことがあった。

「何、で…?」

何で何で何で何で…!!

僕の頭はぐしゃぐしゃにおかしくなりそうだった。

そんな中で、恐ろしい仮説が浮かんでくる。

僕はニンゲンじゃない…?

雨が降り始めた。

周りにはもう誰もいない。小雨達は容赦なく僕の体を打つ。

「痛くない…。」

雨に当たっているのに。痛みも苦しみも、何も感じない。

「生き物には、毒なんじゃなかったの…?」

仮説は強まる一方だ。

僕は家に駆け込んだ。待ちくたびれて安らかに眠るアオを一度見てから、アオとの共同部屋に閉じ籠った。

「シュウ…どうしたんだよ…?」

そこで今に戻る。

アオの悲痛な声にも、僕は耳を貸せない。

「シユウ？カイだけど…開けてくれないかな？」

「ねえ、一体どうしたの？」

アリアの声もする。二人とも帰ってきたんだな、なんて動かない頭で考える。

「…それなら強行突破だ。」

答えない僕に痺れを切らしたのだろう、カイは指をボキッと鳴らした。

一瞬の静まり。

その後ドガツという爆音が家中に響いた。

「…っ！？」

僕のいる部屋に備え付けのドアが倒れ込んできた。

「…やりすぎたかな。」

「修理費はカイの貯金から取るからね。」

ドアを吹っ飛ばしておいて、平然と話すアリアとカイさん。

「シユウ、大丈夫か！？」

アオは僕に駆け寄ってきた。

「あ、えっと…」

「服濡れてんじやねえか！！」

話そうとする僕を無視したその声にアリアとカイさんの会話が止まった。

「濡れてるって…」

「シユウ、皮膚は？どうなってるの！？」

普段冷静なアリアが髪を乱して僕に寄ってくる。

「…僕は、おかしい？」

もう誰の顔も見れなかった。見たくなかった。

きつと、不思議そうな顔で僕の方を見てるはずだから。

「さっき転んだら、血が出てこなかったんだ。…しかも皮膚の下は、銀色になってる。さっきだって雨に濡れたのに何の異変も無いんだ。」

動揺をすべて吐き出そうとしたら、僕はそうまくしたてていた。

「……っ。」

それに驚きを見せるアオ。アリアとカイさんは困惑気味に顔を見合わせる。

それらが僕の心を崩した。

「シュウー!!」

僕はまた家を飛び出した。アオやアリアの呼び止める声を背中にしながら。

雨が僕をあざ笑っているような気がして泣いてしまった。

Delivery children.

第12話（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

ちょっと暗い話ですね…というかシユウ君は情緒不安定ですね。
そのうち大人へと成長してほしい今日この頃は。

第13話(前書き)

この小説を開いてくださりありがとうございます。今回はマリアの視点です。

Delivery children.

第13話

シュウが、家を飛び出した。アオと喧嘩して以来だ、なんて頭の片隅で思う。

「クソ…ッ!!」

「アオ待って。」

カイがアオの腕をつかんだ。

「止めんなよカイ!!」

「じゃあ聞くけど、行って何て言うの?」

「そりゃ……」

アオは口をつぐんだ。

確かに、追って言うべきことが私にもよくわからない。アオも同じ気持ちなんだろう。

「…今から今日あったことを全部アオに話す。手短に言うからちゃんと聞いてくれよ?」

「……わかった。」

「アリアは先に探してて。」

「え……」

見つけたあとに言うべきことがわからないのに? 私はそう表情で語っていただろう。

「大丈夫だよ。いつものようにシュウと向き合えば良い。」

カイが私を気遣ってくれた。

「…わかった。」

その思いを踏みにじるわけにもいかず、傘をさして外へ出た。

とりあえず私は前にシュウが家出したときに見つけた銭湯に向かうことに。

「ミサばあちゃん。」

「なんだい？また仕事帰りかい？」

「違うよ。ねえ、シュウ見てない？」

「シュウ？見てないよ。」

「そう……。」

これで宛てがなくなってしまった。

「何だい、また喧嘩したのかい？」

「……そんなところ。」

「早く仲直りしなさいよ？」

「……うん。」

お礼を述べてから私はまた搜索を開始した。

「シュウの行きそうな場所……。」

まったくわからない。

盛大にため息をつくとき、背後にふと違和感を感じた。

「……。」

私が後ろを振り向くと電柱付近で何かが慌ただしく動いた。

まさか

「……シュウ？」

呼び掛けた瞬間、シユウは私のいる方とは逆方向に逃げ出した。反射的に私は彼を追いかける。

「ハッ…ハアッ…」

どちらのものともとれる荒い息遣いが雨の中間こえる。それなりに長い間走っていたようだ。

シユウは傘をさしておらず、服はびしょ濡れだった。

雨に濡れても平気なのは本当なんだと走りながら実感する。傘をさしたままだと走りづらいということも……

「あ…っ!」

勢いよくシユウが転んだ。私の足は加速した。

「シユウ大丈夫？」

「…っ平気。」

逃げるのをあきらめたのか、廃墟の方に歩き出した。私もそれについていく。

「いつから私の後ろにいたの？」

「…銭湯出たところから。」

すねたような口調でシユウが答える。

「…何で？」

「アリアー人じゃ何かあったとか困るかと思ったの。」

私に背中を向けて、膝を抱えて丸くなった。

「そっか。」

自然と口元がゆるんだ。

「……何で探してくれてたの？」

「何でって……」

「僕人間じゃないよ？」

少しだけ冷たい、拒絶を表す声。

それを聞いた瞬間、何か崩れる音がした。

「……わよ。」

「……アリア？」

「知らないわよそんなの!!!」

「えっ、アリア……」

戸惑うシュウをよそに、私の感情は勝手に動く。

「人間だろうが人間じゃなからうが関係ないでしょ!!!」

人前で……というか生まれてからこんなに怒鳴ったのは初めてかも
しれない。

「……私達仲間じゃないの？」

生まれた家で懐かしい人に会ったせいなのか、昔に置いてきた私の
感情は止まらない。

珍しく泣きそうになった。

「仲間で、いてくれるの？」

シュウの丸い目は少し濡れていた。

「当たり前。それに、シュウが人間じゃないって話はまだ確かなこ

とじゃない。」

「？」

首を傾げる彼に近寄って膝を地面につける。

「アリア……？」

シュウの左胸に手を当てる。

「ちゃんと心臓がトクトクいつてるし……」

左胸から左手へ私の手を移動させる。

「こんなにあつたかいんだから。」

私はニツと軽く笑みを浮かべた。

「……帰る？シュウ。」

立ち上がってシュウへ手をさしのべた。

「……うん。」

私の手をとって二人手を繋いだまま並んで家に帰る。

「いつも僕を迎えにくるのはアリアだね。」

「そっか、そういえばそうだね。」

「あのね、仲間って言ってもらえて嬉しかった。」

「……うん。」

唐突な感想に私は頷くしかなかった。

「だからね、もう逃げないことにした。」

「……そっか。」

シュウにとつての大きな決意。否定する必要がないから相槌を打った。

「今度もしアリアが逃げたら僕が迎えに行くね。」

「……楽しみにしてる。」

手を繋ぐと少しだけ違う体温が伝わってきて、それがなんだか凄く嬉しい。

だからシュウに気付かれない程度に手を強く握り締めたんだ。

Delivery children.

Delivery children.

第14話(前書き)

シュウ視点です。

第14話

「おかえり二人とも。」

「…おかえり。」

カイさんは僕をいつも通り迎えてくれた。アオは複雑そうな顔を
している。

「ただいま。」

「ただいま……。」

僕は何故か少しだけ緊張していた。

「あ、あのさ……。」

アオがおずおずと近寄ってきた。

「？」

「シユウはちゃんと俺達の仲間だかな？」

「……。」

正直驚いた。普段そういう台詞をアオは笑って言ってたから。真
剣な面持ちの言葉が、僕には凄く嬉しかった。

「ありがとう、アオ。」

「…おう。」

「じゃあ、仲間会議でもしようか。」

ポン、と頭にカイさんの手が触れた。

家を出てそんなに時間は過ぎてないのに、酷く懐かしく思えた。

「 というわけ。わかってもらえた? 」

「 ……うん。 」

カイさんは僕に全部話してくれた。僕を探す怪しい組織のこと等を。

内容に対して僕の驚きは少ないものだった。

「 大丈夫? 」

アリアが顔を覗き込んでくる。

「 うん、宣言したもんね。 」

僕は笑顔を見せる。

「 宣言って何だ? 」

アオが不思議そうな目で僕とアリアを見た。

「 あれだよアオ。二人だけの秘密ってヤツ。羨ましいね。 」

あやすようにアオの頭を撫でながらカイさんは言った。

「 ってガキ扱いすんなよカイ!! 」

一気に眉間にシワを寄せ、不機嫌な表情になる。

「 俺から見たら何十年後でも三人は子供なの。 」

カイさんはそう言って微笑んでいた。

そしてその夜

「 ねえアオ。もう寝ちゃった? 」

「 ……起きてる。 」

少し不機嫌そうなアオ。何故かというと、やっぱり僕とアリアの秘密のことだと思う。

「 僕ね、決めたんだ。 」

アオに黙る理由も無いから、僕はちゃんと話すことにした。

「……何を？」

「皆が僕を支えてくれるから、ちゃんと全部受け入れるって。どんなことでもね？」

アオに背を向けていた僕は後ろでアオが起き上がったのを感じた。

「心配すんなよシユウ。何かあったら俺が頑張るからさ。」

「……ありがと。」

でもね、アオ。僕はあんまり無理してほしくないんだ。勿論アリアヤカイさんにも。だって充分すぎるくらい幸せで楽しい毎日だったから。

だから、もう怖いことなんて無いよ。僕が皆を守るから……
そう思いつつ僕は眠りについた。

そしてその日、僕は夢を見ていた。

「まだ見つからないのか。」

「……申し訳ありません。」

偉そうな太り気味の男とガリガリに痩せたスーツ姿の男は電気のない暗い部屋にいた。

周りには怪しい液体がカプセルに入り、淡く光を放っている。

「ゼム、子供一人にいつまで手間取るつもりだ？」

「……仰るとおりです。我々の力不足は認めます。ですから、ちょっ

とした人間に力を借りたく、その許可を頂きに参りました。」

ゼムと呼ばれた男は頭を上げてそう言った。

「ちよつとした人間？」

「最近一番街の裏の世界で『運び屋』というものが名を上げています。」

「運び屋……」

興味を持ったようでもう一人の男の眼鏡に隠れた目が一瞬輝いた。

「はい。それは成功率八割以上で、危険な仕事も殺人もやり遂げる何でも屋に近いとか……」

「その運び屋に探させるのか？」

「我ら研究員が百人で探しても見つからないのですから、少しでも何か変化を起こしたいのです。」

「良いだろう、ゼムに任せる。金に糸目はつけないから存分に使え。」

「ありがとうございます、様。」

でも偉そうな男の人も夢の内容も僕は覚えていなかった。

Delivery children.

第15話(前書き)

カイ目線です。前回出てた怪しい男(?)も出てきます。

第15話

「貴方が『運び屋』ですか？」

「ということは依頼人の方ですね。」

俺は今一番街にいる。何でかってゆうと、目の前の人間から依頼を受けた…というか受けるところだ。

「単刀直入に言います。探してほしい人間がいるんです。」

「……その前にお名前を伺ってよろしいですか？」

「あの…匿名では駄目でしょうか。」

「申し訳ありませんがそれはちよっと…」

まあ本当は良いんだけど。匿名希望なんてみるからに怪しいから。

「…わかりました、私はゼムと言います。セシリア研究所の研究者です。」

「セシリアって色々なロボットの開発を行ってる一番街で結構有名な研究所ですよな？」

「よくご存知ですね。そのとおりです。最近は違う方面でも活動しています。」

「へえー…」

「早速、依頼のことなんですけど……」

「あ、はい。何を運ぶんですか？」

俺がそう言った途端にゼムの目が空をさ迷った。

「運ぶ、というか…探してほしいモノがあるんです。」

「探してほしいモノ…」

「これです。」

テーブルに一枚の写真が乗った。

「……この子を？」

それはシユウ以外の誰でもなかった。

思わず俺は唾を飲む。

「子供に見えますがこれは我々が開発した『R404』というロボットです。」

「…よく出来てますね。本物みたいだ。」

心の中で俺は怒りに似た感情を覚えた。

…シユウを『これ』呼ばわりするなつての。

それと同時に、シユウ自身が言っていた仮説が本当になってしまい、少しシヨツクだった。

「404はセシリアの最高傑作なんです。しかし…逃げ出してしまいました。」

「……ロボットにそんなことが出来るんですか？」

「お恥ずかしい話ですが、私にはそれほど製造能力がありません。」

ダンテ様がロボットに感情や考える力、体温や心音を与える方法を編み出したのです。」

「ダンテ…」

運び屋の顧客リストにはない名前だ。

「彼は研究所の最高責任者です。数多くの作品を生みだしました。」

「素晴らしい方なんですな。」

作り笑いを浮かべて対応する。

「ええ勿論。…どうでしょう、404を探していただけませんか？」

俺は笑みを溢した。

そんな答えはわかりきってる。

「お断りします。」

「…何故です。」

明らかにゼムの表情が変わった。

「俺は探偵ではないんですよ。」

もう話すことはない。さっさと帰ってシユウの飯を食べよう。

俺は会計を済ませようと立ち上がる。

「待ってください。」

「…何か？」

「これだけ情報を話してしまったんです。周りに知られたらどうしてくれるんですか。」

…相当怒ってるな。

ゼムの顔が青白くなり、カタカタと震えている。

「俺は秘密主義ですから。今まで関わった人間に対してもそうしてきました。」

「そんな言葉を信じると思っているのですか？」

しつこい男だ。

俺は自然とため息を吐いた。

「信じる信じないは自由ですよ。ただ言っておきますが、貴方達がコチラ側に無理矢理入ろうとしたら、俺は然るべき対処をさせていただきます。」

まだゼムが何か言いたそうな顔をしていたが無視して喫茶店をあとにした。

「…もうこんな時間か…。」
空はすっかり暗くなって星が瞬いている。
喫茶店を出たときは昼過ぎ、今は勿論夜だ。この期間、俺が何を
していたかと言うと

「俺に何か用？」

「ウグッ…！！！」

ボキッと骨が折れる音が耳に響く。

「肉弾戦は苦手なんだけどね。」

うざったいくらいに俺の後ろを付いてくる男三人。

…俺男にストーカーされる趣味は無いんだよね、全く。

「クソッ…！！いつから気付いてた…！？」

「喫茶店出てすぐ。」

二人目も腹に蹴りをいれた。

「ガハッ！！！」

血と唾液の混ざった液体が男の口から出てきた。

…あーあ、肋骨折っちゃった。痛そう。

「あとは…」

「ひっ…！！！」

「生と死どっちが良い？」

「た、助けてくれ…まだ死にたくない…」

汗と涙でぐしゃぐしゃになった顔の男にすがりつかれた。

「わかった。助けてやるよ。」

「本当か…！？」

「ただし、アンタらのリーダーのゼムって人に言うておいて？」

「…？」

「アンタの組織壊すかもよー、って。」

あんまり俺を怒らせないで欲しいなあ。

「わ、わかった…言っておくから…!!」
「んじゃあ、さっさと俺の前から消えて?」
慌てて俺から逃げる姿を眺めてから、俺は家に帰った。

「ただいまー。」

「おかえり。」

「おかえりなさいカイさん。」

「遅えよ!!夕飯待つててやったんだぞ。」

三者三様すぎる出迎え。俺はそれが面白くて少し笑ってしまった。

「何笑つてんだよ、早く飯食おうぜ!!」

「はいはい。」

今日はシュウ特製のポトフ。いまいち美味しくなかった気がしたのはシュウの努力不足かイツらに気分を害されたせいか…おそらく後者だろう。

「カイさん…美味しくない?」

「え?」

悲しそうな顔でシュウがこちらを見ている。

「いや、腕上げたなあ…って。凄く美味しいよ。」

「…良かった。」

シュウのホツとした表情に俺は胸が痛んだ。

早く事実を話すべきかもしれない…

「あのさ、三人とも…」

「やっとな話す気になった?」

呆れたような声のアリア。

「え？」

「さっきからずっと暗い顔で考え事してんだから気付くって。」

夕飯を食べ終えて満足したアオもアリアに続く。

「カイさん、僕の話なんじゃないの？」

「凶星だ。尋ねてくるシユウに何も言えなかった。」

「僕なら大丈夫だよ？だから…一人で悩まないで欲しいな。」

少し、いやかなり驚いた。俺の知らない間に、三人は子供から大人になるうとしている。

それは俺としては寂しい気もするけど、嬉しかった。

「…話すよ。お前の言う通り、シユウの話だ。」

Delivery children.

第16話(前書き)

シュウ視点です。

第16話

「結論から言うよ。… シュウは最新型のロボットだ。」

予想していたより僕は驚かなかった。まあ驚きはあったけど。どちらかというところとアオとアリアの方がショックを隠せないみたいだった。

「今日の依頼でシュウを探して欲しいってセシリア研究所の男に言われた。」

「セシリアって最近あんまり良い噂聞かないけど…」

「カイ、断つたんだよね？」

「勿論。そしたら向こう怒ったみたいでさ。そのストーカーに追われたから軽く潰してきた。」

「楽しそうな顔で言うカイさん。」

… カイさんを怒らすべきじゃない。僕は瞬時にそう思った。

「此処のこと… バレてないわよね？」

「うん。何回か遠回りしてまいたから。」

「ちよつと大変だったんだよ、カイさんはそう続けた。」

「なら良いけど…」

「あと… 明日からシュウはしばらく外出禁止ね。」

「… え？」

いきなり話が僕に来たのと予想外の言葉に反応が少し遅れた。

「研究所の奴らに見つかったらすぐ捕まると思う。しばらくご飯の買い物とかシュウの身の周りのことは三人でローテーションしよう。」

「

「わかった。」

「了解。」

二人はすぐに納得してくれた。

「よし。じゃあちよつとデネさんのところに行ってくるね。」

そう言つてカイさんは出かけていった。

「外出禁止かあ……」

ぼんやり呟く言葉はすぐに消えていく。

「シユウ。」

アリアが僕を呼んだ。

「何？」

「読みたい本ある？しばらく家で生活するなら、何かあった方が良いでしょ。」

「この前買つてきてくれた本で充分だよ。」

「欲がねえよな、シユウは。もっとワガママ言つて良いんだぜ？」

アオも話に入ってきた。

「ワガママ……」

拾われて居候中の自分がワガママになつちや駄目だと思つけど……。
僕はそう答えた。

「良いんだよ。そんな気にしなくて。」

「そう……かなあ。」

「……俺が初めて人を殺したのは六歳のとき。」

「……え……？」

いきなりすぎるアオの話。

僕の思考は上手く作動しなくて、戸惑うしかなかった。

「しかも母親だ。俺を産んで育てた女。」

「……。」

言葉に出来なかった。

アリアを見れば静かにドアに寄りかかっている。最後までアオの話を聞くつもりなんだろう。

「シユウはシングルマザーってわかるか？」
小さく頷いた。

前に何かの本で読んだことがある。

「親がそれでさ。しかも男好きで俺の父親が誰かわかんねえとか言ってた。」

アオはどこか遠いところを見ていて、声をかけるような雰囲気じゃなかった。

「俺が成長するにつれて、母親はどんどんおかしくなった。たぶん変な薬に手え出したんだろうな。」

外はもう薄明かりがさしている。いつの間にか朝になろうとしていた。

「いつも通り遊んで外から帰ってきたら母親がナイフ持って立ってた。」

僕は背筋がぞくつとした。

当人はいたって平気そうで、続きを話している。

「俺は酷い別れ方をした男の顔にそっくりだ…って言ってさ。笑いながらナイフで俺を刺したんだ。」

想像しただけでも辛い。眉間にシワが寄った。

「それはまあ腕をかすっただけだったんだけどさ。その後の母親の言葉にキレて…返り討ちにした。」

「何て言われたの？」

今までずっと沈黙を通していたアリアが口を開いたのがその言葉だった。

「…お前を産んだのは人生最大の汚点だ。」

苦虫を噛み潰したような表情をしつつ、アオは答えた。
僕の頬を伝うのは涙。アリアも不快感を露にしている。
育ててくれた相手に自分の存在を全否定されることは、辛いかもしれない。

「気付いたら家から逃げててさ。何も考えらんなくて、路地裏にじつと座り込んでた。そのとき、偶然カイに会ったんだ。」
最後の言葉でアオが少しだけ微笑んだように見えた。

第16話（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

今、話の最後の方が見えて書いてるのですが…間が思い浮かばない。

困ってますが、必ず完結させますので！！

Delivery children.

Delivery children.

第17話(前書き)

今回はア才視点です。

第17話

人殺しになつた俺には世界が真っ赤な血に染まつて見えた。
服も着替へたし、石鹸で何度も手を洗つた。それなのに…

「手は血の熱さを忘れないで、体は血に包まれたときとか刺したときの感触を忘れてない。」

ふと自分の手を見た。

まだ子供だと認識されるこの小さな手が、何十人の人を殺し、傷つけてきたのだろうか。

「うづくまつてた俺に、カイが言つたんだ。一人なら一緒にいようよ、って。」

今思えば、誘拐に間違われるような台詞だ。

でも俺はその言葉とカイのキラキラ光る白髪にどうしようもなく興味を持っていた。

「そこで現在に至るわけ。わかつたか？」

「……何が？」

「アオ。話が全く繋がってないわ。」

頭をひねって言いたいことを考えた。

「つまりー、こんな俺でもカイは面倒みてくれてるってことー!!」

「うーん…。」

シユウはあんまり納得してないみたいだ。

「前にカイに言われたことがある。俺だけの名言だけど、しょうがねえからお前らにも教えてやるよ。」

「？」

「何それ？」

アリアも知らなかつたんだな。俺って特別？

少し頬をゆるめて口を開く。

「いつ死ぬかわからない人生なら自分らしく生きる。ってさ。多少のワガママがあった方が相手には嬉しいらしいぜ？」

「…アリアも嬉しい？」

「…勿論よ。」

「アオも…？」

「当たり前だろ。」

不安そうなおオに俺は笑いかけた。

「うーん……。」

それを聞いてシュウは腕を組んで悩み始めた。

「…写真が見たい。」

「写真？」

「うん、あのね、前にその壁に飾ってあった絵みたいな景色の写真が見たい……!!」

シュウはいつもより目を輝かせていた。

「その壁って…確か海の絵……」

「青い海と空の境目。だよな？」

題名を言い当てたアリアにシュウは嬉しそうに頷いた。

「俺には芸術なんか必要ねえもん。」

「負け惜しみみたいで、言ってる自分が馬鹿に思えてきた。」

「…必要ないんじゃないかって、わからないだけでしょ？」

「うるさい。」

そっぽを向く俺を尻目にシュウとアリアは他にどんな本が読みたいか話していた。外を見やれば、朝日が窓から顔を出している。

よく考えれば一睡もしてねえ……。

俺はソファで少し眠ることにした。

「……………」
「寝過ぎたようだ。」

朝日は夕日になるうとしている。

「夜行性になってきたな……」

寝癖つきの頭をガシガシかく。

周りを見ればシュウとアリアもテーブルに顔と腕を乗せて眠っていた。

「はあ……」

風邪をひかれても困る。俺は面倒だったが毛布を二人にかけてやった。

「ん……………」

アリアに毛布をかけるとき、少し身じろいだ。

今更だが整った顔をしている。

「寝てりゃ少しは可愛いのかな。」

なんて独り言を言っていた自分を殴りたくなった。

「アオ……?」

「っ……!」

突然名前を呼ばれて体が跳ねた。

声の元を見ると、寝惚け気味に目をさ迷わせている。

「シュウ……いつから起きてた?」

「今……」

大きな欠伸で答えた。

さっきの独り言は聞かれてなかったようで、俺はホッとした。

「まだ眠いなら寝てろよ。」

「ん……………アオ。」

「?」

「僕はアオが必要だよ。アオがこの世界に生まれてきてくれて嬉し

い。」

泣きたくなかった。余りにもシュウが幸せそうな笑顔で言ってくれたから。

「バーカ、さっさと寝ろ。」

「はい……。」

シュウが眠ったのを確認してから、溢れる涙を袖で何度も拭った。

カイが帰ってきたのはそれから三時間後で、俺達が夕飯……いや朝飯を食べようとしているときだった。

「あのさあ……。」

コーヒーをすするカイは唐突に切り出した。

「何？」

「シュウおかわり。」

「あ、うん……。」

アリアは興味を持った様だが俺とシュウはいつもと変わらない態度をとっている。

「セシリア研究所潰さない？」

「……は？」

俺は箸を落とし、シュウは茶碗を持ったまま固まっている。アリアも大きな目を更に開かせ、驚いていた。

言い出した本人は余裕そうに不敵な笑みを見せていた。

Delivery children.

Delivery children.

第18話(前書き)

シュウ視点です。

第18話

「今日デネさんに会ってはつきりしたんだ。」

「…何が？」

「セシリアの奴ら、この世界中の雨を作ってるんだ。」

「カイ…意味がわかんねえんだけど。」

アオは困惑している。

「正確に言えば、雨の元となる液体を作ったってところかな。」

「…それに何の得があるの？」

思わせぶりなカイの言葉にアリアも気になるようだ。

「今セシリアはこの世界の雨に対応できる物質を開発してる。つまりそれを世界中に売り出して大儲けってわけ。」

凄く壮大な話だ。世界全部が関わってる研究所で僕が作られたと思つと圧倒された。

「で、対応できる物質の塊がシュウだと思つ。」

「……僕？」

「そっか、雨に濡れても何もねえもんな…。」

「ま、説明はそんなもんかな。」

「…それがカイがセシリアを潰したい理由？」

「いや？個人的な恨みがほとんど。」

「個人的な恨みって…？」 つい気になって僕が尋ねる。

「仕事を断つたのに、関わってきたっていう約束違反と…シュウを

物扱いたこと。」

カイさんの目に光が宿った。

「あー俺達を敵に回したな。」

「馬鹿な奴らね。」

アオとアリアもカイさんに同調する。

「シュウ。」

「？」

カイさんは僕に視線を向けた。

「お前の生みの親を傷つけることになるんだけど……シュウはどうしたい？」

「……どうということ？」

「俺達と一緒に来るかってこと。」

「シュウの生まれた場所を壊すのは気が進まないけど……」

三人は僕なしでも行動に移すと言っているのだ。

「僕も一緒に行く。」

「どんなことが起こるかわからないから、何があっても僕が守る。」

「じゃあまず、自由行動だね。」

「……自由行動？」

意外な言葉に僕は思わず聞き返した。

「まだ何もわかってない状況で戦地に行くのは無謀でしょ。デネさんに研究所の設計図とか調達してもらってる最中だから動きようがないわけさ。」

「私買い物してくる。シュウの好きそうな本買ってくるからね。」

笑顔を見せてアリアは出ていった。

「じゃあ俺は奥の部屋に籠るから。」

カイさんもその場を去った。

「……。」

「……。」

残された僕とアオは顔を見合わせる。

「じゃあシユウに良いもん見せてやるよ。」

「？」

「アオ……。」

「あー？」

「どこに行くの？」

「もうちょっとだから待ってて。」

良いものは初めて僕が入った部屋にあるらしい。

その部屋は埃被った物置で、壺やお皿が積み重なっていた。

「これ。」

「……うわあ……。」

目の前にはお菓子の山。しかも半分以上が飴玉だった。

「今まで食えなかったヤツ。」

「……食べれるの？」

常温保存に不安が沸き起こる。

「当たり前だろー!!」

まあアオは気にしなさそうだけど。

僕とアオは互いの背中を寄せあってお菓子を食べ始めた。

「シユウ暖かいな。」

「……アオもね。」

こんな風にのんびり過ごせる日はまた来るかな、なんて暗いことを考えてしまう。

「ねえ、カイさんとアリアの昔ってどうだったの？」

それを僕は一度も聞いたことがなかった。

「カイは…自分の親を殺した人間を復讐で殺したことがあるらしい。親が死んだシヨックで白髪になったんだと。」

「……そう。」

「アリアは親に捨てられて十六番街を歩いてたところをカイが拾ってきた。」

皆にはそれぞれ辛い過去があった。僕だけが悲しい思いをしてるわけじゃない。

「ま、ろくな親に当たらなかった…ってことかな。」

「…僕の親も、酷い人だよ。」

それがこれから潰しに行く相手。

「俺らの親はカイ。それで良いじゃん？」

「…うん。」

運び屋のメンバーが僕の家族だ。

お菓子の甘い香りに包まれ、僕は思った。

「ただいまー。」

アリアが帰ってきた。

「おかえりなさい。」

「はい、これ。」

「…あ。」

渡された紙袋は数冊の本が入っているのが容易にわかった。

「開けてみて。」

目をキラキラ輝かせるアリア。

「自分の選択に自信あるみたいだな。」

棒つきの飴を口に入れながらアオが言った。

「勿論。」

「綺麗……。」

その本は風景画がたくさん入った写真集だった。

「良いでしょ。私も見つけたとき感激したもの。」

「…結構綺麗だな。」

アオも覗き込んでポツリと呟いた。

「あら？アオにも芸術がわかるようになったのね。」

「あ？」

睨みあう二人。

僕は構うことなく、本に魅入っていた。

「あ……。」

最後のページに僕の視線は釘付けになった。

青い海と空の境目だ…。

「あの絵そっくりだったんだよね。」

横でアリアが言う。

「ありがとうアリア！！僕宝物にするね！！」

幸せな高揚感が僕を包み込んでいた。

「お待たせ。始めようか、作戦会議。」

…笑顔のカイさんが出てくるまでは。

第18話（後書き）

読んでくださり、ありがとうございます。

生き物に悪影響を与える雨は研究所で意図的に作られた…というイメージを持っていたただければ嬉しいです。

また明後日お目にかかりたいと思います。それでは。

Delivery children.

Delivery children.

第19話(前書き)

アオから目線です。

第19話

「研究所にいる研究員は約五百人。」

カイは地図を広げて、芯の出ないシャーペンでセシリア研究所を指した。

「五百……」

普段やる仕事とは桁違いの数だ。俺はため息と一緒にその数を口から吐き出した。

「ま、実際俺達が相手にするのはその十分の一なんだけどね。」

「十分の一って五十人？どうしてそんなに数が絞られるのよ。」

アリアの言うことは最もだと思った。

「研究所は二つに分かれてるんだ。一つは機械関係で表向きの第一研究所。もう一つが……」

「表向きに出来ない第二研究所ってわけか。」

俺は続きを言ってみた。カイは軽く頷く。

「これは俺の推測だけど、第一研究所の人間は研究所の裏を知らないと思う。」

「……確かに五百の人間が研究所の全部を知ってるとは考えにくいわね。」

「じゃあ俺らが狙うのは此処か。」

トントンと指で地図を叩く。その場所は勿論『第二研究所』だ。

「その通り。……シユウ大丈夫？」

「あ、うん……。」

戸惑い気味なシユウ。

「そういえばさつきからずっと黙ってたな。」

「わからないところ、ある?」

「アリアも気にかけているようだ。」

「僕なら大丈夫だよ。だから続けて?」

「シユウはそれをぎこちない笑顔でかわした。」

「緊張しているんだろう。こんな真面目な俺達の会話をシユウは見ることがないだろうから。」

「…どっちの研究所も常に無休だ。一日中誰かしらいる。第二研究所で何かあれば第一研究所の人間も気付くと思う。」

「四百五十人もどうするの?」

「寝てもらうのが一番手っ取り早い。」

「寝る?」

「シユウが少し関心を持ったみたいだ。」

「そこで登場するのがこれ。」

「…何だよこれ。」

「俺はカイが見せてきた白いボールを持った。」

「それは思ったより軽く柔らかい。」

「睡眠薬入りのボール。床に思いっきり叩き付けたら爆発して粉が飛ぶようになってる。」

「また変なもの作ったのね…。」

「アリアは呆れている。それもそうだろう、カイはこういう発明が趣味だ。しかも見事に使う気にならないものばかりだ。」

「カイさんの発明品かあ…。」

「あーあ、シユウ本気で尊敬してるよ。」

「なあ、これ本当に大丈夫なわけ?」

「俺は思わずそう尋ねていた。」

「勿論。試す?」

「……やめとく。」

「一瞬試そうかと思ったが命は惜しい。」

「まあ、実験済みだから問題ないよ。」

「あ、そう……。」

もう何も言わないことにした。

「第一研究所はそれで何とかするとして、第二研究所にはどうやって入るの?」

「強行突破……って言いたいけど、流石に無理があるからこの通気孔から入ろうと思ってる。」

「……カイ通れんの?」

「無理だね。だから三人に入り口の警備員を片してもらって堂々と入らせてもらうよ。」

俺の問いにあっさりと言うカイ。

「あの……」

おずおずとシュウが口を開いた。

「どうかした?」

「研究所を潰すって具体的にどんなことするの?」

「そっぴゃ……」

さっきからずっと入ることばかり考えていて重要な部分を聞いてなかった。

アリアも同じ気持ちらしい。あんぐりと口を開けている。

「機械や装置は全部壊す。まあこのメイン装置を壊せば全部動かなくなると思っよ。」

「最低でもメイン装置は壊せつてわけね。」
「そういうこと。」
その後俺達は一通りの流れを確認して会議は終わった。

その夜

「…アオ、起きてる？」
電気も消し、ベッドでうとうとと眠ろうとしたとき、不意に隣のベッドにいるシュウに呼ばれた。

「…起きてるよ。」
「ごめん、眠たいのに呼んで。」
「悪い癖だよな。」
「…え？」
「すぐ謝るの。」
「ごめ……あ。」
言ったそばから謝ってるし。変な奴だな。
俺は笑いを噛み殺しながら布団に丸まった。

「どうしたんだよ。」
ひとしきり笑った後、背を向けたままシュウに聞いた。
「あの、さ……」
口ごもり、なかなかしゃべろうとしないシュウ。
もしかして……と俺の中で仮説が浮かぶ。
「怖くなったのか？研究所潰し。」
「違うよ。ただ、お願いがあるんだ。」
「…お願い？」
シュウが大きく息を吸う音がした。

「僕のこと、忘れないでほしい。」

その言葉を聞いた俺はカツとなってシュウにつかみかかった。シュウが死ぬ気だから。

「本気でそんなこと言ってるのか？」

「……。」

シュウはうつ向きたままだ。

「何とか言えよ……!!」

嘘とか冗談だよとか……何でも良いから……

「……何も言わない。」

「お前……ふざけてんのか？」

「ふざけてなんかじゃないよ。研究所潰しは僕の命を賭けた戦いなんだ。」

澄みきった漆黒の瞳でこちらを見ているシュウ。この目には全て見透かされているような気分になる。

「俺らだって同じように命賭けてる。」

運び屋はいつだって命を賭けてやってきた。

「それは駄目なの。」

「シュウ……一体何言ってるんだよ。」

目の前の相手は何を考えているのか俺には全く読めない。

「だって、怪我するかもしれない。三人を傷つけたくないよ……。」

「まだそんなこと言ってるのかよ。もう決まったんだ。」

「……。」

「心配すんなよ。ちゃんと俺が守ってるから。」

「……ありがと。」

安心したのか腹を決めたのかはわからないが、シュウはすぐに眠ってしまった。

俺はというと

「はあ……。」

眠気はほぼ完全に覚めてしまったようだ。

パジャマのポケットに忍ばせておいた飴玉を口に運ぶ。

「……守ってやる、か。」

妙な気分だ。誰かを守るなんて今までなかった。

仲間になったから……なのだろうか。シユウという一人の人間に好感を持ってたからかもしれない。

ともかく、俺はこれからも四人でいたい。柄にもなくそう思いながら、俺は瞼を閉じた。

Delivery children.

第20話(前書き)

シュウの視点です。

第20話

「二人とも良い？」

アリアがアオと僕に視線を向ける。

「おう。」

「…うん。」

今日が作戦の決行日だ。つまり僕の生まれた場所の消える日。僕とアオとアリアは真夜中の路地裏にいた。

「シュウ、これカイから。」

真っ黒な服に身を包んだアリアが紙袋を渡してきた。

「ありがとう…。」

持った感じは重い。中身は銃とナイフだった。

僕は黙って二つを服の中にしまい込む。アオもアリアも何も言わなかった。

「行きましょ、時間がなくなるわ。」

この時間帯は研究所にいる人が一番少ないのは事前に調べてあった。

少し狭い通気孔を通って第二研究所の入り口付近に出る。

「警備員は四人みたいだな。」

アオがサツと盗み見た。

「私とアオだけで充分ね。シュウは隠れてて？」

「…わかった。」

足手まといにはなりたくなかったから、僕はおとなしく指示に従う。

「ちゃんと気絶させてよ？」

「そっちもな。」

すぐに分担が決まり、一気に二人は行動に移った。

「！！誰……」

「ガッ……！！」

数秒で片がついた。警備員達は皆ぐったりしている。

「お疲れ様。」

いつもの笑みを浮かべ、マイペースに中に入ってきたカイさん。

「こいつら本当に警備員かよ。弱すぎ。」

「アオ達が強すぎるんじゃない？」

僕は疎外感を持ちつつもそう言った。

「さて、進もうか。」

結局作戦の方は出会った敵は戦闘不能にする、という無謀に近い強行突破となった。

「……結構広いね。」

アリアが呟く。確かに歩く道全てが同じように見える。

「シユウ、ここら辺に見覚えある？」

「うーん……通ったことある気がする。」

未だに霞みがかかった僕の記憶。それはある扉の前で霞みを取り払われようとしていた。

「此処は……。」

「何か思い出した？」

アオが聞いてきた。

僕は何も答えずに扉に指を触れる。ガーツ、と機械的な唸り声を

上げて扉は開いた。

「　　。」

僕は目の前に広がる光景を見て誰一人言葉が出なかった。

部屋にはたくさんの壊れたロボットらしき人が何体も積み重なっていた。

しかも

「全部シユウにそっくりじゃねえか…。」

そう、どのロボットの顔も僕に瓜二つだった。

「此処にいる皆は僕と同じように作られたロボット達だ。」

「…シユウ？」

頭に色々な記憶が蘇ってくる。

「一緒に生まれて、一緒に過ごした仲間だった。」

「おいシユウ…。」

「シツ、聞いて。」

戸惑うアオをカイさんがなだめた姿を横目で確認しつつ、僕の口は止まらなかった。

「一緒にいるにつれて、お互いの存在に疑問を持つようになって、ダンテに聞いたんだ…。」

「そうだ、ダンテは夢にも出てきてたじゃないか。」

「ダンテって…？」

「この研究所の最高責任者で、シユウや…此処にいるロボットを作った人間だよ。」

「……。」

不思議そうにカイさんに尋ねるアリア。ダンテのことを知るとうつむいてしまった。

「その日から少しずつ仲間が消え始めた。出来の悪い仲間から。」
「……。」

僕以外は誰もしゃべっていなかった。

「そのうち全員が壊されると思った僕達は、一番性能が良かった僕が逃げることになったんだ。それで研究所の実体を広めるって……」
どうしてだろう。今ならいくらでも思い出せる。

「そう約束したのに……」
守れなかった

そう続きを言うことも出来ずに、僕はただ泣いていた。

「…誰か来るな。」

「シユウ、悪い。」

「え……？」

アオに体を押されて僕は仲間達の中に埋まった。

真っ暗になった視界で聴覚だけが研ぎ澄まされる。

「おや、運び屋の……。こんな場所までどうしたんですか？」

「ゼムさん…でしたっけ？」

「覚えてて下さったんですね。」

温和な会話に聞こえるが、互いに思っていることは真逆の感情だろう。

「…そちらが仲間の方々……？」

「まあ、助手つてところです。」

「そうですね。では本題に入りましょう。此処で何をしていますんです？」

バタバタと多くの足音が聞こえた。デネという男が呼んだのだろう。

「ちょっと道に迷ったんです。」

カイさんらしい冗談が飛ぶが、相手は笑っていないようだ。

「捕える。」

「わかりました。」

冷たい声でデネが仲間にもう指示した。

皆が危ない　僕は体を動かそうともがくがロボット達の重みで体が沈むだけだった。

「触んなつての!!!」

アオの怒鳴り声とともに、殴る音がする。

「…やはり強いですね。」

「お褒めいただき、光栄です。」

カイさんは息を乱すことなく答えた。そのとき

「デネ、仕事は済んだか？」

懐かしい声を聞いた。

「ダンテ様…。申し訳ありません、まだです。」

「遅すぎて待ちくたびれたが。」

「も、申し訳ありません…。」

「ところでR404の姿がないが？」

驚きのあまりビクツと体が跳ねた。

僕の存在がバレている。

「隠れていると思われませぬ。」

「…そうか。運び屋、といったね？」

「そうですね？」

気丈な声でアリアが答えた。

「君達は十六番街の住人だね。運び屋のことは少し調べさせてもらった。」

「……。」

「睨まないでくれ。君達の行動次第で十六番街の未来が決まるんだ。」

大切な居場所を奪う。そうだ。ダンテはこういう人間だった。

「おとなしくしていれば危害は加えないさ。R404を連れてきてくれたんだから。」

カチツという音が三つ鳴った。

「そのわりには手錠なんか使っんですね。」

「まあ暴れてもらわれても困るからね。」

穏やかそうな声に吐気がした。

「さて…、いるんだろう？R404。」

ダンテの声が変わった気がした。

Delivery children.

第21話(前書き)

ア才視点です。

第21話

「さて…、いるんだろう？R404。」
出てくるなよ

「この三人を殺しても良いのか？」
俺は死んでも良いから、頼むから出てこないでくれよ…。
けど俺の願いは叶わなかった。

「…三人には何もしないで。」

シュウは壊れたロボットをかき分けて現れた。

「R404…会いたかったぞ。私が誰かわかるか？」

「僕を作った人。それ以外知らない。」

今まで聞いたことがないくらい冷たい声。それほど目の前にいる男が憎いんだろう。

「やはり記憶の部分に故障が生じたのか。」

「…っ、シュウは故障なんかしてねえ!!」

俺は思わず叫んでいた。体を動かそうとすると、数人の男が俺を
押さえ込んでくる。

「…シュウ？」

不思議そうな顔でダンテはシュウを見た。

「僕はシュウって呼ばれてる。今までも…これからも。」

「そうか…お前の仲間もそれぞれ互いに名前をつけて読んでたな。
そういう感情も出来るわけか。」

「出来るとか言うな!!感情はあって当たり前なんだよ!!」

「タダンテが見せる反応に腹が立つ。」

「……うるさい子供だ。おい、三人まとめて倉庫に入れておけ。」
「わかりました。」

俺達は男達に引つ張られて、部屋をあとにした。

「シュウ。」

「……。」

「私と一緒に来なさい。……心配せずとも彼らを殺したりしないで。」
「……。」

シュウがダンテについていく姿を見つめながら。

「出せよコラ!!」

分厚い倉庫の扉を俺は何度も叩いた。

「止めなさいよ、体力の無駄。」

アリアに止められて、仕方なく二人のいる隅に戻った。

「カイ、これからどうするの?」

「……予測外だな。シュウの体に反応する機械があるなんて。」
唸りつつ、カイはそう言った。

「早く此処から出ようぜ。」

「でもシュウの行動も把握しないといけない。とにかく今は作戦を
考えるべきだよ。」

「……シュウが前に言ったんだ。この仕事に命賭けるって。」

「……。」

「だから俺も命賭ける。」

思いきりドアを蹴った。足が痛くなっても絶対に止めたりしない。
「シュウは俺らを守るうとしてるんだ。」
しゃべりつつも足は止めない。シュウを放っておけるか。

「本当に単純に育ったなあ。」

真後ろでそんな声がしたもんだから俺はかなり驚いた。

当人であるカイは特に変わった様子もなく、右足を空に掲げてドアを蹴り破った。

「……。」

呆然とする俺とアリア。

「ま、そこがアオの数少ない長所なんだけどね。」

「…なんかム力つく。」

「本当のことでしょ？」

なんだ、いつも通りじゃねえか。

妙に安心した俺は軽く笑みを溢した。

「移動しよう。このままじゃさつきと同じようになる。」

俺達は倉庫から少し離れた段ボール箱の山の陰に隠れた。

何処から持ってきたのか、アリアが針金でカイの手錠を器用に外した。両手が自由になったカイが俺とアリアのも外す。

「両手も自由になったし、行こうか。」

「行くつて…何処に？」

「さつきシュウの行動を把握出来ないと言ってなかったか？」

「言ったよ？だからメイン装置のあるところに行く。そこならきつ

とシュウの居場所がわかる機械があるはずだから。」

「わかった。」

「じゃあさっさと行って終わらせようぜ?」

精神的にも身体的にも疲れる仕事だな、なんて思う。

「先頭行くのは構わないけど…場所わかるの?」

「あ……。」

地図を持つてるのはカイ。俺は此处について何も知らないんだっ
た。

「馬鹿。」

「んだと?」

「はいはい、喧嘩は仕事が終わってからね。」

カイになだめられ、仕方なく口喧嘩は終了。

シュウ搜索と救出のために、俺達は走り出した。

Delivery children.

第22話(前書き)

シュウの視点で書いてあります。

第22話

「どうだい、なかなか良い部屋だろう？此処を君だけの部屋にしよ
うと思ってる。」

アオ達を気にしつつダヲテについてきた。

通された部屋は一番街を見下ろせる高さで、大きな窓がある部屋
だった。

「僕に此処で生活しろっていうんですか…？」

「勿論だ。」

一度逃げたのをわかった上で此処に閉じ込めるダンテの精神が僕
には全くわからなかった。

「この部屋が気に入らないなら他に用意させる。」

「僕は此処で過ごす気はありません。」

「彼らの場所に戻れると思ってるのか？」

言葉に詰まった。自然と手がポケットのナイフに触れる。

「馬鹿な真似はするな。」

鋭い目付きで僕は睨まれる。

前にもこんなことがあった。何故自分が出来たのかと聞いたとき
だった気がする。そのときはくだらないことを聞くなど一蹴された。

「人を傷付けるのを恐れるお前に、私は殺せない。」

「……。」

凶星だ。返す言葉もなく、僕はダンテを睨むことしか出来なかつ
た。

「トマ、何処にいる？」

「ハイ。ゴ主人さま。」

現れたのは僕そっくりのロボットだった。

動きは僕と同じくらい滑らかだが、言葉にはたどたどしさが残る。

「しばらくシユウの話し相手になってくれ。」

「ワカリ、マシタ。」

「逃げようなんて考えるなよ?」

「……。」

反抗して目を反らす。

ダンテはフツと笑い、部屋から出ていった。

「何カ飲ミマスカ?」

「……いない。」

僕はソファの隅に膝を抱えて座っていた。

トマの方を見れば、そこらをつろつろしている。

「あの……座らない?」

「……失礼シマス。」

ソファの端と端に黙って座る僕とトマ。

まるで鏡みたいだ。横を見れば自分そっくりのロボットがいるのだから。

「シユウ様は、ゴ主人様ガ嫌イデスカ?」

「……嫌いだよ。あんな人。」

それなのに逃げ出せないのは自分が弱いせいだ。

うつむいて膝に顔を埋める。

「ゴ主人様ハ僕ヲ大切ニ扱ツテクレマス。……自分ノ子供ソツクリニ作ツタカラ。」

「ちよつと待つて……何て言ったの?」

彼の声は聞きとりづらい。意外すぎるその言葉を聞き間違えたか

と思つて僕は逸る気持ちを押さえて尋ねた。

「チョット待ッテテクダサイ。」

トマは何処からか紙とペンを持ってきた。

サラサラとペンを走らせて、僕に紙を差し出す。

「僕達は自分の子供の代わり……？」

読み上げるとトマは頷いて再びペンを走らせる。

「ご主人様の子供は事故で死んだ。血の繋がりはなかったけど、親子みたく仲が良かった……」

紙の上で踊る文字が信じられなかった。

「チョット見テホシイ物ガアリマス。」

手を引かれ、部屋のクローゼットに着いた。

「ねえ、何があるの？」

トマは答えずに分厚い本を取り出した。

「ドウゾ。」

「これ…アルバム？」

何を意図しているのかわからなかったが、アルバムを開く。

そこにはダンテと僕やトマに似た少年がいた。二人とも幸せそうに微笑んでいる。

「ソレガゴ主人様ノ子供、レオ様デス。」

「……。」

「ダンテ様ハ、モウ一度レオ様ト生キタインデス。」

「…そんなこと、駄目だ。」

「シユウ様……」

「トマは良いの？身代わりのままで……！！」

僕は揺れていた。…揺れてしまった。ダンテにそんな過去があることを知らなかったから。

トマの顔に悲しそうな笑顔が広がった。

「ソノ気持チガナカタラ、僕ハ此処ニハ…イナイカラ。」

トマの言葉は間違つてない。むしろ正論だ。

ダンテの子供がいなくならなければ、僕だつて此処にいることはない。

「デモ、今ノゴ主人ハ皆ヲ困ラセテ自分ダケガ幸セカニナロウトシ
テイマス。…シユウ様。」

「……？」

「才願イデス、ゴ主人様ヲ助ケテクダサイ。」

潔いくらいサツとトマは僕に頭を下げた。

「助けられないよ…僕は此処を壊すために来たんだ。」

「ソレデ良インデス。」

「…え？」

「全部、壊シテ。ソレデゴ主人様モ元ニ戻ルカモシレマセン。…タ
ダ。」

「ただ？」

「…デス。」

「……っ！！」

トマの言葉に僕は大きな決断を迫られた。

Delivery children.

第23話(前書き)

カイ視点です。

第23話

「あまり低レベルなことをしないでもらえませんか？」

「…よく俺達の居場所がわかりますね。」

正直なところ、面倒なときにゼムに会ってしまった。

「直感は鋭いんです。」

穏やかな笑みにも俺には奇立ちしかなく、どうやってこの場を切り抜けるか考えていた。

「それにしても…驚きました。貴方達が逃げ出すなんて。」

「あきらめが悪いんです。うちの仲間、返してもらえますか？」

「悪いがシユウは此処で暮らすことになった。」

俺の言葉のすぐ後、ゼムとは反対側のところにダンテが立っていた。

「…何？」

アオが聞き返す。久々に見た彼の殺意のこもった瞳。

「君達の仲間である彼は、此処に住むんだ。」

それに臆することなく、ダンテは答える。

「もう部屋は用意してある。」

「そんなの知るかよ!!!」

「シユウを返して!!!」

アオとアリアが叫んだ。

「…子供はうるさくて敵わんな。カイ君と言ったね？」

「…何でしょうか。」

「その二人に言い聞かせてくれないか？シユウをあきらめるよう

に。慰謝料ならしつかり払わせてもらう。」

ダンテが指を軽く弾き鳴らし、アタツシユケースを抱えた男が走って来た。

男が素早く中を開くと、そこにはいくつもの札束が詰まっていた。

「…これでシユウをあきらめると?」

「そうだ。」

後ろではアオが今にも飛びかかりそうで、それをアリアが腕をつかんで止めている。

前を見れば優越感に浸る大人達。

「申し訳ないですが、これくらいの金額ならこちらでも簡単に用意出来るんですよ。」

思わずフツと笑っていた。アオやアリアだけが報酬の使い道に困ってたわけじゃない。俺だって生活費くらいにしか使わずに、今まで貯金してきたんだ。

「この倍以上の金額を払えば、シユウを返していただけるんですか?」

「…それは出来ない。」

「ダンテ様…!!」

ダンテの決断にゼムは驚きの声を上げた。

「もっとお金があればR404以上の完成品が出来ますよ…!?!」

「シユウを物扱いすんな!!」

再びアオが怒鳴る。

「…うちの子、あんまり怒らせないでもらえます?キレると俺でも簡単に止められないんで。」

それを押さえつつ横目でゼムを睨みつける。

ゼムは戦闘向きではないらしく、ヒツと息を飲んで小さくなった。

「余程シユウの顔に思い入れがあるようですね。」
「……………」

「あれだけ同じ顔を作るなんて、俺から見たら狂気の沙汰ですよ。」
「あの子は…私の子供だ。」

ダンテの言葉にアオは動きを止めた。無論、俺やアリアもその事実
実に固まっている。

「事故で死んだ息子と、もう一度人生をやり直したい。」
重々しい言葉。それは本心だとわかるのには充分だった。

「だからシユウは渡さないし、君達を此処から逃がすわけにもい
かない。勿論、酸性雨の計画を崩すことも……………」

ダンテの目にぐっ、と力が入る。

「…殺れ。」

大人達が小型銃を構えた。そのとき

「緊急事態発生。緊急事態発生。」

警告音とともに、機械の音が鳴り響く。

「何事だ!!！」

ダンテが大声で叫ぶ。

「メイン装置室に何者かが侵入しました!!！」

「何…!?!？」

「まさかシユウ…?？」

アリアが呟いた。

「行こう。」

俺はアオとアリアの腕をつかんで走り出した。

Delivery children.

Delivery children.

第24話(前書き)

ア才視点です。もうすぐ最終話ですよー。

第24話

メイン装置室に入った俺達を迎えたのは十メートル近くある馬鹿デカイ塔だった。

これがメイン装置だ、そう思った俺やカイはすぐに愛用の銃を取り出した。

「あれ見て!!」

「アリアが指差す先には……」

「シュウ!!」

見慣れた黒髪の少年、シュウがいた。

「皆!!良かった…無事だったんだね。」

「そんなことよりお前やってんだ!!危ないから降りるよ!!」

シュウは塔の頂上付近に立っていたのだから。

「やだ。」

首を横に振る。

「は…?」

俺の中で怒りが沸々とこみ上げる。

「三人とも、これは僕に壊させて?」

シュウが微笑みながら言う。

「というか、これは僕が壊さなきゃいけないんだ。…約束したから。」

「約束って…誰と?」

不安そうな表情のアリアが尋ねる。

「……もう一人の僕。」

そう答えるとシユウはカイからもらったナイフをポケットから出した。

「シユウやめてくれ!!」

「やめるんだR404!!」

俺達の到着に少し遅れてダンテやゼム達がやってきた。

「ダンテさん。」

「…シユウ…?」

強い眼差しでダンテを見つめ、シユウは思いきり息を吸った。

「僕は、これを破壊します。それが、レオの願いだと思うから。」

「……レオ？」

聞いたことのない名前だったが、ダンテを動揺させるには充分だったらしい。

「何故その名前を…」

「トマから聞きました。…彼もメイン装置を壊すことを望んでいません。」

「…馬鹿な…」

喉の奥から絞り出すような声のダンテ。

「以前の貴方に戻って欲しいと言っていました。」

「……馬鹿な奴だ。その装置を壊せば雨を作る機能どころかお前達も動かなくなるぞ…!!」

「何、だって…?」

シユウが動かなくなる…?」

「そんな…!!」

「……っ。」

アリアやカイも動揺を隠せない。

「わかってます。」

平然と言葉を交わすシユウ。

「部屋でトマからちゃんと聞きました。」

いつものシユウじゃないみたいだ…。

「これで皆が幸せになるなら、僕は喜んで死にます。」

シユウの晴れ晴れとした笑顔を見るのは久しぶりかもしれない。

「アオ。」

「？」

「この仕事に、命賭けたよ。」

その言葉とともに、シユウはナイフを振り上げた。

「おい、お前らあのガキを撃て！！」

「ゼム…！？急に何を言ってるんだ！！」

ダンテが声高にして叫んだ。

「ダンテ様、あれが無ければ我々は終わりです。」

ゼムは冷静に言った。

「止める、シユウを…レオを撃つなんて私は許さないぞ！！」

この研究所の最高責任者はシユウと自分の子供を混同してるみたいだ。

ゼムに命じられた奴らはシユウに照準を合わせている。

「止める！！」

ダンテの声は最早届いていない。

俺の横に風が走った。

「あんな子供が命張ってるんだ。見届けることくらい出来るだろ？」

風の正体はカイだった。撃とうとしていた男の銃を手で割った。

それに俺とアリアも続く。研究所の人間を片っ端から殴り倒した。

シユウが命を賭けるなら、誰にも邪魔はさせない

「…さよなら。」

そうシユウが呟いたのを俺は気付かず、ナイフを振り下ろした音だけが聞こえた。

Delivery children.

Delivery children.

第25話(前書き)

アリア視点です。

第25話

華奢なナイフは大きな機械に深く突き刺さった。

「な、なんてことを…」

「……。」

顔を大きく歪めるゼム。それに引き換えダンテは無表情だった。ビシビシとひびが入り、塔が崩れる。

それと同時にシュウの体が宙を舞い、地面に落ちてきた。

「シュウ!!」

「シュウ!!!」

体が反応せずに叫ぶしか出来ない私とアオ。

その代わり、カイが勢いよく走ってシュウをギリギリ受け止めた。

「シュウ!!」

「しっかりしろよ!!!シュウ!!」

「あ…まだ動け、ル…?」

ぼんやりした表情のシュウ。目の焦点がずれているようで、何処か遠くの方を見つめている。

声もかすれたような機械的なものになりつつあった。確実に…確実に終わりが近付いている。

「皆…怪我ハ？」

「ないよ、大丈夫。」

カイは両腕でシュウの体を支えている。

「あの人、結構可哀想な人ダツタ。僕ハもう恨みなんか無いカラ、殺さないであけて？」 動かない体に鞭を打ち、シュウはダンテを指差す。可哀想な人とは、自分の息子を失ったことだろう。

指差された本人は泣き崩れていた。

「わかった。」

早口でカイが答える。

カイも気付いてるんだろう。シュウの最期を。

「皆ト…一緒にいれテ僕は幸せダツタ。」

息で出てるみたいにシュウの声は弱々しかった。

「そ…!!もう終わりみたいなこと言うなよ…!!」

アオが泣きながらシュウにつかみかかった。

止めるべきだろうが一番親しかったのはアオだ、怒る権利がある。

それに…泣いていて私には止める力が無かった。

「僕のお墓、作って欲しい。海と空の境目が、一直線二なってるト

コロ…に。」

「シュウ…!!」

「…それが、僕のワガママ。」

それから、シュウが動くことはなかった。

「シュウ…!!」

泣きながらシュウの体を揺さぶるアオ。カイもシュウの手を強く握り締めていた。

その隣で私は、いつだかシュウとアオと私の三人で話していたことを思い出した。

多少のワガママは相手にも嬉しい。そんなことをシュウに言った気がする。

「最初のワガママが最後なんて、何考えてんのよ…。」

口ではそう怒りつつも、目から溢れる涙はなかなか止まらなかった。

Delivery children.

第**話

「アオ、そろそろ行くわよ？」

「待つ…寝癖が直んねんだよ!!」

一番大きな最後の仕事から十年の月日が経った。

「置いてく。」

「は!?!待てつて!!」

俺は相変わらずアリアに馬鹿にされる毎日を送っている。

今日はシュウに近況報告をしに行く日だ。

シュウの遺言通り、俺とアリアとカイは海と空が水平線になっている場所に墓をたてた。

「カイ…今頃頑張ってるかなあ。」

ポツリとアリアが呟く。

「政治家目指してんだよな。まあ、カイなら大丈夫だろ。」

あの出来事が終わってすぐに、カイの運び屋解散宣言が出た。

勿論俺とアリアは訳を聞いた。

「この国を根本から変えたいなんて、言われたときはびっくりしたけどね。」

そう、カイは今の世の中を変えたいと思うようになったらしい。

ちなみにダンテは警察に捕まったが、心を入れかえて環境保全のための開発をしていると噂で聞いた。

「パパー!!! ママァー!!!」

まだ四歳の子供が走って来た。：単純に言えば、俺とアリアの子供だ。

カイと別れた後、俺達はそこらをさ迷った。最初は貯めていた金で過ごしたが、成長してまともな仕事に就けるようになった。

そこで：まあ色々あつて俺とアリアは恋に落ちた。照れ臭いからあんまり話したくねえ。一時期、アリアがシュウを好きだったとアリア本人から告げられたときは複雑だったけど。

「あんまり走ると転ぶぞー。」

今、他愛もないこの瞬間が本当に幸せだと思う。

「わあ…っ!!」

「：本当に転んだわ。」

冷静：というか冷めた瞳でそれを眺めるアリア。

「しょうがねえなあ。」

俺は苦笑しつつも、泣きそうな我が息子の元に走った。

「アリア。」

前々からずっと考えていたことを、俺は話そうと思っていた。

「何？」

「シュウは…幸せだったかな…。」

ほんの数カ月生活しただけでも、未だに心が忘れることを許さない。

「当たり前じゃない。だってシュウの最期は笑顔だったもの。」

「そうだな。：なあ、此処に家建てようぜ？そしたらシュウも淋しくねえだろ。」

俺の視線の先には歪な形の墓石がある。それとの帰り際の瞬間が、シュウとの永遠の別れな気がしていつも嫌だった。

「…良いわね、私も考えてたの。」
アリアは綺麗に笑ってみせた。

「シュウって…パパ達のお友達だった人？」

不思議そうに首を傾げる子供。

「そう、勿論今も大切なお友達。だから貴方にシュウって名前をつけたのよ？」

シュウに向かって微笑んだ。

「優しく真っ直ぐな人間になるようにな。」

「ふーん…、じゃあ僕頑張るね!!」

それからまた一年後、海に見える小高い丘に小さな白い家を建てた。そこはいつも、明るく笑顔に包まれている。

Delivery children.

第**話（後書き）

ようやく完結しました！！ラストは皆さんのには如何だったでしょうか？個人的にシユウを死なせるのは辛かったです。

全体的にシリアスな感じですが皆さんに楽しんで頂けたら嬉しいです。

長い間この作品を読んでくださり、ありがとうございました！！

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3257b/>

Delivery children.

2008年11月7日07時41分発行